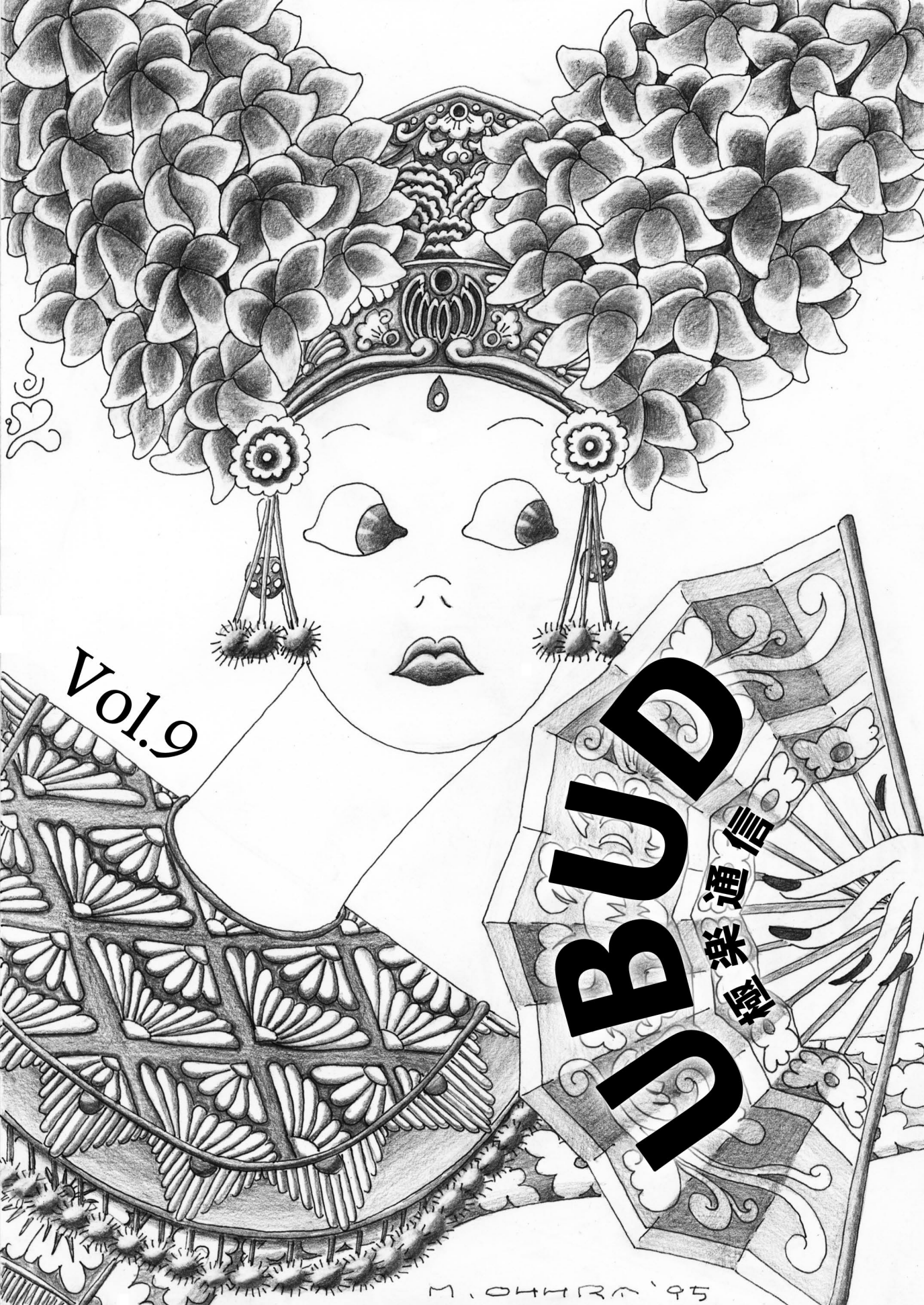

Vol.9
UBUD
通信
M.OHHRA '95

極楽通信
UBUD

U・B・U・D ◆ I・N・D・A・H

photo: Y. Hori

祈るという行為は世界中で見られるものである。無宗教派の多い日本でも正月に神社へ行けば必ず柏手を打ってお参りをする。とはいっても、この祈りの瞬間に何を祈るかは人それぞれである。日本では家内安全、商売繁盛、受験合格などがトップ３であろうか？バリでは一年に数えきれないほどの祭事や神事があり、その都度あらゆる人が真剣に祈る姿を目にする。聞いたところによると、バリの人はまず全宇宙の幸せから祈り、次に地球、そしてバリ、その次に家庭や自分のことといった順番で祈るのだそうだ。これには恥ずかしながら目から鱗が数枚こぼれ落ちた。個人主義で自分を主体に考えてしまう我々（ひょっとして私だけか？）とは根本的に違うのである。たぶん地球のバランスを支えているのはバリの人々なのであろうとも思ってしまう。

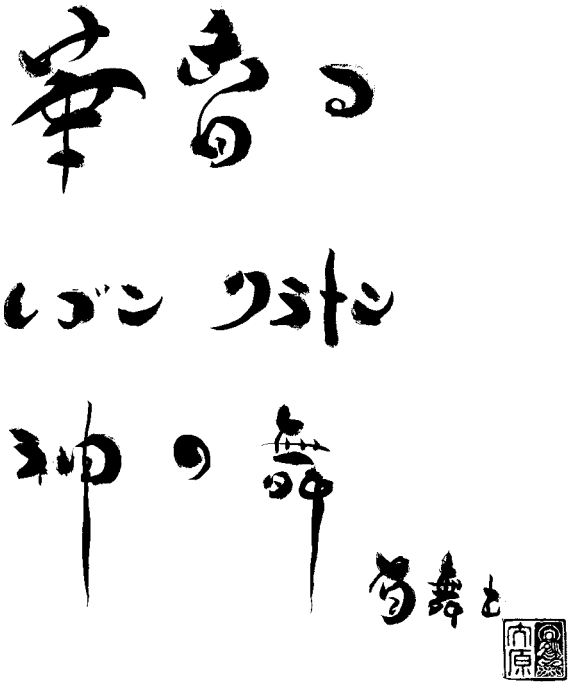
というわけで、全世界の人々がこういった優先順で真剣に祈ってくれたら .... と祈るのが最近の私ではある。

Vol. 9 1995 Juni

Contents

● Kabar Baru Berita Lama
夫婦ともに楽しめるエアロビクス in Ubud ---- 4
洗剤について Part II ---- 5
● Culture Shock
飛行機 ---- 6
● Nyepi
裸で過ごすニュピ ---- 8
●バリの舞踏
CAKAPUN ---- 10
● BINTANG/1
ビンタン涅槃楽【1】---- 12
● Dari Jepang
日本語なんて話さなくてもいいです ---- 16
● WAYAN ／ ADOADO
WAYAN 君の ADO!ADO!JEPANG ---- 17
● C・O・L・U・M・N
ぶらっく　まじっく ---- 18
● Ubud Buku Catatan Harian
うぶどぅ日記【4】---- 20
● C・O・L・U・M・N
Bali, 自由を求めて ---- 25
● Pelajaran Bintang
バリ島・星空散歩道〔7〕---- 26
● Warung　味な店
The Noodle ---- 32
● Pondok Manis　私の常宿
UBUD VILLAGE HOTEL ---- 33
● Pesan & Kesan　旅人一声 ---- 33
● Apa it? ---- 34
● Ubud の環境を考える ---- 34
●その他のニュース ---- 35
●ウブッな人々 ---- 37
●オダラン情報 ---- 38
● Pengumumaan　伝言板 ---- 38

○表紙のことば○



編集室便り

●入稿に関するお願い

編集部では、Macintosh による DTP 作業で版下を作成しています。原稿をお寄せくださる方で Text Data で入稿可能な方は、以下の方法でお願いします。

□Macintosh フォーマットの FD (Text Data)
□ Dos フォーマット（2DD-720KB）の FD (Text Data)
□ E-Mail :
MHC03202: 菅原 (NiftyServe)
GCB01162: 堀　　(NiftyServe)
potomak@st.rim.or.jp (Internet)

※詳細は、裏表紙にある日本連絡先事務所までお問い合わせください。

夫婦ともに楽しめるエアロビクス in Ubud

乾期の照りつける太陽が、そろそろその激しさを和らげる夕暮れ時。気持ちよく辺りをJalan-Jalanしていると、ふと聞こえてくる大音量のディスコ・ミュージック。どうやら音源はバンジャールのワンティラン（村の集会場）からのようだ。「ムムム…、どこぞの若者が、こんなに大きな音でカセット鳴らして、けしからん」と思ってふとのぞいてみると…。う"っ、ううううーっ!!一瞬絶句。そこには色とりどりのスパッツやらトレーニング・ウエアーやらを着こなした、バリのibu-ibu（奥サマ）方が、なんとエアロビクスを踊っている姿があったのだ。それも十数人という数である。「これもご時勢か…」と少々面食らって、ぶらぶら歩いていると、ひやー！パダンテガルのワンティランでも、ウブッド・カジョーのワンティランでも、あちらでも、こちらでも、同じように、ibu-ibuが踊っているのだ。いっ、いったい、この現象は何なんだ?!　不可解なモノに直面した極通特派員は、さっそく追究してみた。

実はコレ、来る８月に行なわれる、バリの政府（厚生省）主催によるLomba Senam（体操コンテスト）のための練習なのだそうだ。政府の主旨は、今まで、とかく家にこもりがちだったバリの女性達が、より健康的に、生き生きと人生を楽しむように、ということらしい。UbudそしてGianyar県と勝ち進んだバンジャールが、最終的にデンパサールの決勝戦に出られる。熱が入るのも無理はない。それにしても圧巻である。

今まで、ズルズル、ダブダブの服しか着たことのない、そして「わたしゃ〜バリ・ダンスも踊れーへんよ、ハッ、ハッ、ハッ」と豪語していた、あのibu達が、今どきのディスコ・ミュージックで、今どきのエアロビを、ぴっちり・スパッツでびしばし踊っているのである。ちょっと観る方が照れてしまうようなこの光景を、うしろの方に座り込んでニヤニヤ観賞している一団がいる。

「アドウ〜、あそこの奥さんはいいケツしてるなあ…」

「なんだなんだ、あいつの嫁さん、レゴンの名手だったくせに腰のフリが貧弱だぞ」

「うわあ、おまえんとこの女房、いいプロポーションだなあ…」

……。そう、彼女達のダンナ達である。道行くツーリストをながめて、一日中でも座っていられるこの男達が、このまたとない、非日常的、刺激的、興奮的ながめを見逃すはずはない。中には自分の女房に惚れ直したダンナもいるだろうし、隣の奥さんにイケナイ興味が湧いてしまったダンナもいるかもしれない。

このエアロビが、本当に彼女達の生きがいとなって人生を楽しませるかどうかはわからないが、少なくとも、奥さま方のみならず、ダンナさま方をも充分楽しめる時間を提供していることは確かである。…と感心しながら、踊っているibu-ibu達を観るよりも、それをうしろでながめているbapak-bapak達の様子を観ている方がおもしろい…と思った、極通特派員なのであった。

Peliharalah Lingkungan UBUD

UBUD の環境を考える／番外編

洗剤について Part II

Vol.8 のこのコーナーを読んだ Ubud 在住の O さんが、さっそく、ためになるお話を書いてくださいました。それをここにご紹介します。

結論から言いますと、バリで売られ、使われている全ての洗剤及び石鹸に関しては「絶望的状況」にあると言わざるを得ません。洗剤及び石鹸を多く取り揃えて販売しているデンパサールのデパート、スーパーで調べてみますと、殆どの物に成分表示がありません。ある物でも必ず合成系の洗剤成分にトリクロロなんとかなど助剤を混合した物です。そして洗濯用洗剤はその色から見て明らかに蛍光剤も入っています。さらに恐い事に蛍光剤入り洗剤が衣類だけでなく、食器も洗える万能洗剤としてクリーム状となって売られているのです。

合成洗剤や助剤、蛍光剤は日本でも使用が認められていますが、それは単に「人の肌に触れても問題が無いと言う理由によります。つまり洗剤の流れて行く先の事や手にケガをしている人が使用した時の事などは考えられていません。ですから日本で売られている物と同じ物なら大丈夫という事は全くありません。

合成洗剤の害については、日本では多くの本で紹介されています。簡単には、合成洗剤は使用後に分解しにくく、分解には数か月、数年かかってしまうこと。トリクロロなんとか等のカタカナ名の助剤は、劇薬のたぐいが多く、人体に間違って入ると害がありますし、流れ出た後に虫その他の生物及び土中で洗剤等を分解してくれる微生物を殺します。洗剤のすすぎ水をトイレ排水に流すとの事ですが、あれは自然濾過しているとともに、微生物分解を期待している方法ですので良いとも言い切れません。トイレに水をたくさん流すことさえ微生物には良くないのです。
蛍光剤については、衣類に蓄積され再度洗っても落ちません。ディスコ等の照明で服が青白く浮かび上がって見えるにはこのためです。蛍光剤は干すうちに衣類を黄ばませますし、人の肌に害を及ぼします。

そこで、今後どうしたら良いかを考えなければなりません。

案1：合成系でない、パーム油、ヤシ油、動物油から作った純石鹸（97% 以上）を外国又は他島から輸入する。個人では難しいので共同購入するのが良いと思います。シンガポール、マレーシア等にあれば良いのですがわかりません。日本にはありますが、合成系より高いため難しいでしょう。

案2：純石鹸を Ubud で作る。レストラン、ワルン、家庭で料理に使用した廃油を集め、カセイソーダ（だったと思う）とごはん少しを混ぜて火にかけると作れると聞いています。全行程３～４日程と手間がかかります。クリーム状の石鹸が出来るので、身体を洗うにも食器用にも洗濯用にも使用出来ます。カセイソーダの入手と多くの人の協力が必要です。油集めがたいへんですから、石鹸作りの方法についてはどなたか日本の図書館等で詳しく調べていただけると有り難いです。
合成で無い石鹸の良さは、分解が早いことにつきます。１日から２日で分解が完了してしまうそうです。つまり、有機物が無機物に変わって植物が養分として使える状態になります。97% の純石鹸ですと、洗浄成分がほとんどなので使用量も少なくて済みます。合成系のコンパクト洗剤なみです。

しかし、良い事ばかりではありません。石鹸は分解するまで強アルカリですから、植物や動物には害があります。そして有機物ですから川に流せば「よごれ」の一種です。使い勝手にも多少問題があります。それでも分解が早いので合成系よりだいぶましなのです。

私のバリ生活も５ヶ月になろうとしています。日本から持ってきた純石鹸は使い果たし、今残っているのは石鹸歯磨きだけとなりました。これからのことを考えると、全自動洗濯機が欲しいのですが、使用できる石鹸洗剤が無いので買えません。今は使ってみた感じが石鹸に一番近い白いＬＵＸで洗濯と食器洗いをまかなっています。変だと思うでしょうが。是非皆で協力して何らかの手を打ちましょう。今、まさに「崖ぷっち」の状況なのです。

バリの役人にお願い：日本のように下水道をコンクリートできれいに作らないでください。極力微生物の力を利用しないと、食べカス、ウンコ、洗剤も海へストレートです。日本の下水道行政の間違いを繰り返さないようにしてください。

Culture Shock

1

飛行機

佐藤　美貴子

「話しかけないでね!!」私の顔は鬼と化し。やっちゃん顔負けのドスのきいた声。真すぐ前を向いたまま、足をふんばり。右手につくったゲンコツ状態（怖くてギッチリ握っているため）のまま、約8時間飛行機の中ですごしたのは私程ではないでしょうか…。離陸の時など“この世の終わり”の気分。何とか気を穏やかにさせようと優しく話しかける主人にも「だまって!!話しかけたり動いたりしたら、飛行機に影響あるでしょバカ!!」などと、わけのわからないことをごねまくり。そのくせこわいので左手は主人の手をぎっちりこんと握っているのであります。そうです、私はハネムーンでガルーダ・インドネシア航空で、バリへ飛んだのです。乗るまでは、アテンションプリーズなどと、おめでた気分だったのですが。乗りこんでから「なぜこんな重いものが飛ぶの？」気流にちょっと乗ってもスゴイやまんばのような顔をしてムダなのに踏んばり。「大丈夫だ気流に乗っいるんだよ」と言ってくれる主人にも「うるさい!!」とやつあたり。まったくかわいそうなのは主人である。しかしバリに行こうよね～と、決めたのは私だというのに…。さすがに着陸したときは、ヘナヘナ…ゲンナリ。もう二度と乗るもんか!!と主人に文句を言い（心の中でゴメンナサイゴメンナサイと思いながら、ずっとやつあたりをしていたバチあたりな私）。しかし考えてみれば、帰りはどうすんのー!!葉っぱに乗って、こいで日本にかえれっていうのー全くどうしようもない私である。

17日間バリで、いろんな方にめぐりあい、いろんなものを見たり、ゲリピーで死ぬ思をしたり。いろんな体験をしながら、主人の思やり、暖かさが身にしみ。さいごの旅ウブドでは、同じ女性として、

とてもステキに思うユミチャンとの出会いは、私の心をゆっくりと自然に、和かなものにしてくれました。ユミチャンとはモチロン、「影武者のユミちゃん」デス。彼女の笑顔を見、そして素直な人柄に私は自分がとても恥ずかしくなってしまった。そしてウブドの心やさしい人々に触れ、生かされている自分の一瞬一瞬をたいせつに素直に受け入れて、肩の力をぬいて生きよう。バリも素晴しかった、そして又おかげで日本人である自分にも再びめざめた。帰りまぎわに、テロがあったり。飛行機事故を新聞で見て、あとづさりも少ししたけど。帰路の飛行機はがんばるぞ、そんな気持で乗りました。

夜行便なので、夜中の３時頃起きているのは私ひとりになってしまい。しかし、乗員の一生懸命サービスし、働く姿を見たり。目が合ったので、怖くてひきつりながらスマイルする私を気づかってか、紀子様もマケソウな、優しいさわやかスマイルをかえしてくれ。心細い私は、この時言葉が通じなくとも、笑顔の力の大きさを身にしみました。そういえば、仕事から帰って来て玄関をあけたとき「笑顔でむかえてくれるのが、うれしい…。」などと無口な主人が言ったのを、あ～そ～程にしか思っていなかったけれど。私はそれ以来、私は自分のことに精一杯で、人に対して何もしてあげられていない、それならせめていつも優しい笑顔でいよう…そんな気持でくらせています。

真夜中、今思うとこっけいなのですが。うしろを見ることにチャレンジしたり、一人でトイレへ行き、トイレの戸にタッチして急いでシートに戻り「ヨシ‼なんとか少しクリアーした、ゼーゼーゼー」など少しでもガンバロウとしていたのです。

来るときは、お祈りしたり、主人にあたったり、心は嵐だったけれど。これも何かのご縁でガルーダに乗ったのだ。こんなに誠意をもって働いている乗員のいるガルーダ航空なら、きっとパイロットもそういう方なんだ、信頼しよう…。そして万がいちのことがあっても、きっとパイロットは全力を尽くしてくれるだろう。もうそれで充分だ…。今、この今を、たいせつな一秒一秒みけんにシワ寄せてすごすのは止めよう。心和かにすごそう…。そしてもし無事に帰れたら、くらしをもっといつくしんで、日々重ねよう。そうふっきれて主人を見ると、ヒステリーをおこしていた私の手をにぎったまま、疲れきった子供のようにねむっていました。怖いから窓のとびらはあけるなと私に言われ、せっかく窓側だったのにごめんなさいと思いながら、右手に顔をやると、そちらの窓から朝日がさしこんでいたのです。白い神々しい光を見ながら私は泣いていました。わがままで、思やりのなかった自分を心から反省しました。

主人が目覚めたとき、にっこり笑って（デモこわばってたかなあ）「おはよう」と言い。あと何時間か頑張るね…と、機内食にも手をつけ、飛行機を出たとき主人に「頑張ったな…」と言ってもらいました。

日本にきてから、和服をきることが多くなりました。今もキュッと身をしめてペンを走らせています。ウブドへ行ったことで、私の中にねむっていた、ちょぴりはある優しいきもち、暖かいきもちが、めざめたようです。りきまず、自然に、私らしくある気持よいくらしがつづいています。そして今度は子供と主人とで、にこにことウブドの地へ訪れようと心ひそかに思っている私です。

イラスト：FUMIO

じゃじゃーん、やってきました、今年もNyepiが。なんと今年は4月1日、エイプリル・フールがNyepi。Vol.2にも書きましたが、Nyepiはバリ・カレンダーのサカ暦ということよみのお正月、つまり元旦にあたる日です。Nyepi前日には、島中が騒然となり、ハリボテのおみこしは出るわ。爆竹はガンガン鳴るわ、悪霊を追い払う儀式は賑やかに行なわれるわで、もうウキウキ状態。そしてNyepi当日は、朝、陽が昇ってから、翌日の朝まで、バリ人、外国人、バリにいる人々すべてが、外出禁止になり、夜もなるべく明かりをつけず、静かに静かに過ごすのです。敬虔なバリ・ヒンドウー教徒は「働かない、火を使わない、殺生をしない、外出しない」の四つの教えを忠実に守り、一日断食して、宇宙と世界の平和を祈って、一日を過ごします。

さて、今年のNyepiの前日、ここUbud、及びギャニアール県全域に、政府からある“おふれ”が出されました。ーーホゴホゴと呼ばれる“おみこし”は大きなものは作ってはいけない。たとえ、小さくても、大通りに出てはいけない。爆竹も禁止ーー「えーっ、そんなあ〜〜」Ubudの若者達はガッカリ。実は昨年のNyepiの前日、ギャニアールでお祭り騒ぎが度をこして、けんかが始まり、死亡者が出たのです。いろいろきびしい“おふれ”を出すことで今や有名なギャニアール県長、これを放っておくはずはありません。でも、さすがにここはバリ。巡回のPolisi（警官）のスキを盗んでは爆竹だってバンバン、ホゴホゴだって少しはメイン・ストリートに出ちゃたも〜ん、Tidak apa　apa!! ってな感じでした。Nyepiは、前日のお祭り騒ぎ、バカ騒ぎがあってこそ、Nyepiなのだ、と思っている人々も多いに違いありません。今年はなんとなく拍子抜けしてしまったNyepi前夜祭、少し残念でした。それにNyepi当日の夜、びっくりしたのは、昨年と比べて、ライトをいつもと変わらず、こうこうとつけているところが目立ったこと。昨年までは、どこもかしこも漆黒の闇でした。それが、観光客の泊まるホテル、とくにP・G・II、ここは庭やプールまでもが明るく照らし出されていました。せめてUbudは、Nyepiの夜の完璧な暗闇を守ってほしいと切に思います。そのうち、前夜に追い出したはずの悪霊が明るく輝くライトを見て、「しめしめ」と戻って来てしまうのではないかと、ヒヤヒヤしてしまいます。まあ、何はともあれ、今年もみなさんが平和で、安全で、健康でありますように！！・・・というわけで、今年のNuepiを、ここUbudで経験したFUMIOちゃん（21）のレポート、楽しんで読んでね！

● 裸で過ごすニュピ ●

文&イラスト／ FUMIO

バリに来るのは二回目の私。ニュピ体験は初めての事。少ない知識と無い脳みそをフルに働かせて本を読みあさり、なるほどと、すっかりバリ人気取り。何もしない日＝ニュピ。何もしない事をした事のナイ私、日本でもTVくらいは見ている。バリ人を気取ってもやはり日本人。何か違うニュピの過ごし方は無いものか、と思ったとき「ソーダ裸で過ごそう」。私は少し嬉しくなって、想像してみる。元々この「裸で過ごす」を提案をしてくれたのは、私と同じロスメンに住むO氏で、自分の体験談を話してくれた。ニュピの前日だし、これはいい機会であると、ひとりニヤニヤしてしまった。でも恋人と裸で過ごすのとは訳が違い、ひとりで過ごすニュピである。

ニュピの前日「ホゴホゴのパレードがあるよ」とロスメンの人に教えられパレードを見に出かけることにした。何日も前からJL. Kajengで、怪物づくりに若い男の子達が、町をはしゃぎ回っていた。日本の“みこし”と同じ様。私の小さい頃の日本の祭りも（といっても10年位前）お酒を飲んで勢いついた若者達が、みこしを威勢よくかつぎ、町中をねったものです。近くに怪物がやってきた！観ている方にも、ものすごいパワーを感じる。怪物が音にあわせ、右にかたむき左にかたむき、そのたびに周りの人垣も「ワア〜」という歓声と共に右へ左に移動する。この怪物達は本当に怖い、忘れられずに、夜、夢に見る子もいるでしょう。私は懐かしさと楽しさとで、とってもいい気分です。夕暮のランプの光も、とても心地がいい。ホゴホゴ達もきっと大満足でしょう。一番可笑しかったのは、ずうーっとホゴホゴのうしろについて回っている観光客です。西洋には“みこし”は無いのでしょうか？文化の違いは不思議だなア〜と、西洋の方々に「Hello」と挨拶をする私。

その夜、眠りについたのは朝の4時。バリの方々はもう起きる時間です。にわとりさんの声、犬の声、宿の人の声、の中、私は眠りについた。もちろん裸で。

朝、起きて（といっても10時過）一番最初に思った事は、ナント情けない事に「お腹へったー。」サロンを体に一枚く

るりと巻いてテラスへ出る。ほかに泊り客は二組。アメリカ人のカップルとO氏。カップルはやっぱり何もしていない様子。O氏は音楽を聞いているようだ、タバコに火を付ける音が聞こえる。隣の隣にあるロスメンから、日本人女性とバリ人の会話が少し聞こえてくる。いつもと同じ朝、でもバイクの音がしない、静かだ。私は、サロンを気にしながら、いつもより丁寧に椅子に座る。さっそく何かしたくてたまらない。キョロキョロと自分のまわりを見渡すと、少しの果物と少しのお菓子が置いてある。とってもうれしい…。でも、少しガマンしてみたい。タバコに火を付けて深く吸い込み、はいた煙をゆら〜っとながめる。アッ、今日はタバコもダメなんだっけ、でも、ごめんなさい、これだけはやめられない。といってまた一口。フダンから私は「禁」に弱い。ダイエットを初め、禁煙、禁酒、禁、禁、禁、続いたためしがない。今はする気も起きない。こんなだらけた私にニュピが過ごせるだろうか。でも、裸だからとひらき直って、横にあったキャンディーをつまんでしまう。その一口が悪かった。ますます、お腹が空いてくる。頭に浮かぶのは食べ物の事ばかり。なぜか中華料理が思い浮かんできた。あーたまんない、違う事を考えるのだと思ってももう遅い。円卓の上をお皿がグルグルまわっている。あーだめだ目が廻る。そーだ、誰も居ないハズのJalanの事でも考えよう。よしいい感じ、円卓がJalanに変わってきたゾ。今JalanにいるのはPoliceだけだ。Policeは、本当の魔物よりタチが悪そう、きっと本物の魔物なんだろうな。

11時を過ぎるとO氏が私の部屋に訪ねて来た。O氏の話はいつも楽しい。しかし今日は何か落ち着かない。そーです、私はサロン一巻きで中は裸なのです。動物的直感なのでしょうか、本当に落ち着かない。グルル…心の中で吠えてしまいそう。でも話しているうちに慣れてきた。しかし、やっぱり気になる。O氏はよりによって刺身の話を始めた。なにもこんな日に限って刺身の話はないだろ〜。あーまぐろが食べたくなってきた。ブツブツと切って、しょうゆをドバーッとかけて、わさびも一緒にごはんの上へ、そしてのりかなんかもドバーッとかけて。もう頭の中はまぐろ一色。まぐろの刺身か食べた〜い。

30分位過ぎたでしょうか、Ibuがナシ・チャンプールを作ってもって来てくれた。仕事もしちゃイケない日なのに…ごめんねIbu。私も一緒にニュピを過ごすよ。半分犬にあげて、半分私がありがたーくいただいて、又O氏と話しだす。午後一時、暑くなってきた。

マンディをするといってO氏は自室へ戻り、私もマンディに。ひとりになりカギをしめ、サロンをはずす。「あー解放感」冷たいシャワーも今日はより一層気持ち良い。でもニュピの日にマンディはいいのかしら。マンディ・タイムは夕方？まあいいか。体にいいのが正月だ、と勝手に思い込んでしまおう。マンディが済んでちょっと昼寝する。そろそろJalan・Jalan開放の時間。宿のマディに「マンディ・タイムはJalan・Jalanできるよね」と聞いてみる。「え、僕しらないよ」とマディ。私は思わず目が点になってしまった。あんなに心待ちしていたJalan・Jalanなのに。でも在日本人が「できる、できる」と言っていた。ちょっと 寂しい気分でロスメンの門でたたずむ。私のうしろで人の声「ちょっとなら大丈夫だよ」とマディのお嫁さん。私は多分子供のように喜んでいたのでしょう。クスクスと笑われ、それを背にいざJalanへ、もちろん服は着 ています。ポツポツと子供達がいる。私と同じでがまんできなかったのでしょう。JL;RAYAに出てみるとなんだかとても楽しい光景。子供達も今日は王様。バロンと一緒にJalan・Jalan。サッカー・ボールやバトミントンの羽も飛び交う。あちらこちらに男の子、女の子達の群ができ始める。宿の住人ニョマン達もゾロゾロとやってきた。子供と一緒に私もJalan・Jalan。なんだかとっても不思議な光景だ。そのうちに陽が沈んでくる。みんなの顔がぼんやりしてきた。「帰るよ〜」（バリ語なので解りませんが）あっちこっちで、お母さん達の声。みんな家へ帰っていく。私も帰ろうー。

ロスメンに着くなり「マカン！」の声。「私も今日は食べないよ」「何を言ってるの、私達はいつもの様に食べているのに」「エッ？何ソレ、だってニュピでしょ」「でも大丈夫なのよ」。そりゃそーだ、ストレスをためる事が大嫌いで、疲れるとすぐ風邪をひく素直なバリの方々、決して無茶はしない。あっけにとられながらも「今日はいらない」と言い切って、自室へ。フッと思った「一年の計は元旦にあり」という諺。バリの人はニュピといえども、無茶はしない。ずーとこうして生きてきたんでしょうね。自然の島、神々の島、自由の島、BALI。だんだん好きになる、もっともっと好きになる、まだまだ好きになる、BALI。ゴロンとベッドの上。ちゃんと下着付けよ、もう裸で一日中過ぎせる歳ではない。人も進化して行く、自然もソレを受け入れるハズ。人と接する時間が長い程、裸でいることは難しいものだと実感。きちんと（？）人間らしいかっこをして、やっぱりこれが落ち着く。私もストレスはためたくない。私にとってのニュピは、裸で過ごす事のつらさと恥かしさ。バリ人の無茶のない生活。来年もし又、バリに来ることができたら、もっとバリ人の心とミックスした、無茶のない生活をしたいなと思った。

こうしてニュピの夜は更けていくのでした。

バリの舞踏

CAKAPUN

チャカプン。えっ？新しい踊り？いえいえ、むか〜しの踊りです。聞いたことのない名前でしょう。これは、踊りというよりも、パフォーマンスです。ご説明しましょう。

バリ東部、カランガッスム地方、時は18世紀。オランダによる支配がバリに及ぶ以前のこと。ここカランガッスム王国は、バリの中でも強大な勢力を誇っていました。ある時、隣のロンボク島のチャクラヌガラ*1を攻め、勝利を治めました。そしてチャクラヌガラで、カランガッスムの兵士達はチャカプンを観たのです。それを国に持ち帰り、この地方の人々に伝えたのが、そもそもの始まりだったわけです。今では元祖ロンボクではチャカプンは廃れてしまい、カランガッスムにしか残っていません。しかし、ここでもだんだん、この踊りは観られなくなっています。少し前まではデンパサールのアート・フェスティバルにも出演していたし、この地方でウパチャラ（結婚式、葬式、その他の儀式）があれば、酒が*2入って心地良く酔った男たちが車座になり、自然にチャカプンが始まったそうです。それではこのチャカプンはいったいどんなパフォーマンスなのでしょう。極楽取材班は、たまたま現地で観るチャンスがあったのでその模様をお伝えしましょう。

演じてくれたのはチャカプンのご本家、ブダクリン村*3のイダ・バグースご一家のBapak達、総勢11名。バンタンが供えられ、マントラが響き、線香の香が漂う中、一人の語り（唄い）役のBapakが朗々と、お経のような、詩吟のようなものを唄い始める。それに合わせて寂しい音色のスリン*4とルバブ*5が入る。ある一定の節目までくると、エンドのところだけ全員が声を合わせてユニゾンとなる。これが数分繰り返され、車座になった男達は、おとなしく座ったまま身じろぎもしない。顔つきも神妙だ。「‥‥？チャカプンてこういうもの‥‥？」と少し不安になり始めた時、それはおもむろに始まった。輪の中の一人が、いきなりガムランのガジャール*6役になって「ブン、ブン、ブン、ブン‥‥」と正確にリズムをとって唄い始め、続いてすぐ別の一人が「チャカチャカチャカチャカ」とチェンチェン*7役、そしてまた別の一人が「ドウ、ドウ、ダッ、ダンダンドウン」とクンダン*8役を、というようにガムラン楽器をすべて口で唄い始めたのだった。「こっ、これは‥‥口ガムランだあ！」そのリズム感のすごいこと、あの複雑なコテカン*9まですべて正確に唄ってしまうのだ。そして出ました！唄いながら、一人ま

た一人と、座ったまま即興で踊り出す。８小節くらいの一定のメロディーを繰り返し、今までの神妙な表情はどこやら、皆満面の笑顔をたたえ、目をカッと開けて、実にハイな状態になっている。メロディーに合わせて、向かい合った二人がジェスチャーで掛け合いを始め、すっとぼけた顔をしてみたり、ケンカの真似をしてみたり、鉄砲を撃つしぐさをしてみたり、なんだかみょお～におかしくて、ゲラゲラ笑っていると、中の一人が観客の私達を一人一人輪の中に招いて、ジョゲ・ブンブン*10もどきを始めた。

しばらくすると急に口演奏と踊りは終わり、再び、最初の詩吟のような唄が始まる。そして又スリンとルバブが入り、しばらくするとにぎやかに唄い出して、突然一人ずつ狂ったように踊り始め･･･と、このような感じで延々と繰り返される。もちろん、一曲ずつメロディーは違うし、そのメロディーをベースにしておのおのがアドリブで音（声？）の装飾をつけていくので、聞いていて飽きることがない。何よりも、そのリズム感のよさにびっくりである。その複雑さと緻密さはシャネルズの唄うアカペラの比ではない。ジャズ演奏者も顔負けの、そしてとっても楽しいチャカプンであった。

「いやあ、夜に、酒を飲みながらやると、もっとノリがいいんだけどねえ」と、頭をかきかき照れていたBapak達、聞いてびっくり、その中に82歳、75歳のおじいちゃんもいたのでした。彼らが言うには「もう、こんな歳だから」と、今では村でもめったに演じることがなくなり、今、これを受け継ぐべき若者が少なくて困っているのだそうです。このブタ・クリン村の青年団も、今やっと３曲ほどできるようになったばかり。こんなすばらしいパフォーマンスが消えてしまうなんてもったいない！！カランガッスムの青年よ、がんばっておくれ！

このチャカプンは、キング・レコードのWorld MusicシリーズのＣＤにも入っているそうです。興味のある方は聴いてください。

●解説●

*1　ロンボク島西部、現在のマタラム市に隣接している街。
*2　ここではヤシ酒、トウアックやアラック。
*3　カランガッスムにあるティルタガンガから近い、小さな村。
*4　竹笛。
*5　胡弓に似たバリの弦楽器。
*6　ガムラン楽器の編成のひとつ、リズム・キーパーの役目をする。
*7　ガムラン楽器の編成のひとつ、高音のシンバルのような音で、こまかくリズムをきざむ。
*8　バリの太鼓。
*9　一定のフレーズを一対の楽器が交互に奏でる、ガムランの典型的な奏法。
*10　娯楽性の強い踊りで、普通は竹でできたティンクレックという打楽器で編成した伴奏を伴う。女性の踊り手が、観衆の中から一人ずつ舞台の上に招き、即興でおもしろ可笑しく踊る

ビンタン湿槃楽

南部弘

●イントロ●

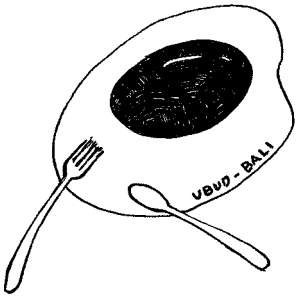
1993 年 12 月。各経済誌に取り上げられる程のご立派なバブル倒産をやってのけてくれた会社にご奉公させて頂いていたおかげで、私は欲しくもない無期長期休暇（つまり、失業した訳ね）を頂戴し、やってられっかよ、とばかりに、借金の返済もせずにバリにやってきた。会社さえまともにいってたら、丁度 10 年目の研修旅行（と、いう名目の慰安旅行）の年にあたっていたせいもある。初めての海外一人旅はハイテンションのまま、あっという間に終わってしまい、忘年会シーズン真最中の日本に帰国。毎晩の様に飲みに行った席上、同じ土産話を何度もしている内に、「面白そうだから、忘れる前に記録にして残したら？」と、そそのかされ、ごく親しい友人に配る目的で、ちょっとした文庫本程度のボリュームのある日記形式の紀行文を２週間で書き飛ばした。それがこの雑文の基盤になっている。原題は、熱帯の無国籍人。勿論、コリン･マックフィーの熱帯の旅人（House In BALI）をもじった事は断るまでも無い。なにせ、年賀状さえ 10 年以上も出していない程の筆不精の私が書いたものだから、読み辛い点が多々あるとは思うが、何卒ご容赦願いたい。

1

第 1 章
酔っぱらいの罰当り、レヤック現象に遭遇

ロスメンの超不味い朝食を済ませ、物売りの姿もちらほらし始まったクタのビーチに座って私はウブドに行く算段をしていた。ウブドは、クタから 20 キロ程内陸にある芸術と音楽の中心地だ。勿論ビーチは無い。弟夫婦もつい最近、新婚旅行でウブドに滞在していた。バスツアーの時に通りかかったのだが、中心部が開け始まった田舎町といった趣の村だ。この近辺には優秀なガムランのグループが多く、毎晩どこかしかで定期公演をやっていると聞いた。バリに来て五日目、踊りのバックミュージックとしてしか機能していない、気が抜けた様なガムランの演奏に失望し始まっていた私は、これは行かにゃあなるまい、と思ったのだ。小一時間もぼんやりしていると白タクの運ちゃんが英語で声をかけてきた。彼は、マニックと名乗った。歳は 28、スマトラから出稼ぎに来ていると言う。今日はいい天気ですね、どこから来たんですか、から始まる世間話をたっぷりしたところで、今日はどうする予定ですか、と聞いて来たので、ウブドに移動するつもりだ、話すと、車があるからチャーターしないか、と言ってきた。渡りに船だ。言い値はメータータクシーで移動したとして私が予想していた額丁度だったので、値段交渉もせずにそのまま妥結した。ジープタイプとバンタイプ､2 種類持ってるから、どっちがいいか、と聞いてくる。常識で考えれば、出稼ぎの運転手が車を 2 台も持っている訳がない。これは私の想像だが、バリの白タクで自分の車で営業しているのは僅かで、他はレンタカー屋で借りるか、又は複数の車を所有する元締めがいて、仕事を取ってきた順に車を貸し、あがりの一部をとる形になっているのだと思う。その証拠にウブドに行く途中で、俺のボスがウブドの近くに用事があるから、途中で拾って行っていいか、と聞いてきた。別に問題は無い。もし何かあったらここに居るから、とロスメンの名前を告げ、2 時に同じ場所で待ち合わせをする事にして一旦別れた。荷物をまとめるべくロスメンに戻ると、従業員達がギターを弾きながらわいわいやっていた。見た感じでなんとなく私がギターを弾ける、と思ったのだろう。ギターを渡して来たので、ちょろちょろっと弾いて見せると、穴でも空きそうな目つきで私の指先を見つめている。捜せば凄い奴もいるんだろうが、私の知る限りでは、バリ人のポピュラーミュージックに対するアプローチの仕方は概ねルーズだ。まあ、あの暑さの中でたて乗りのパンクなんか演奏して頭を振っていたら、命がいくつあっても足りないだろうが、ギターはローコードをちゃらんちゃらんと鳴らす程度で、気持ちがいいからいいか、と言う程度の様に見受けられる。ギターに限らず、ドラム、ベース、つまりロックミュージック三種の神器を演奏する時も同じ様なものだ。何度かレゲエバンドがカフェで演奏しているのを、ちらり、と見たが、大学の学園祭の方がまだましだ。ちらり、としか見なかったのは、酒が不味くなりそうな位下手だったから演奏をしているカフェに入らなかった

為だ。バリ滞在中に何人ものギターを弾けるバリ人と盛り上がったが、上手いと思った奴は一人もいない。おまけにチューニングをしている奴は一度も見なかった。勿論、日本にいたってそんなに凄い奴にはなかなかお目にかかれるもんじゃないが、少なくとも路上や店先でギターを弾いている奴は、自分は下手だとは思っていない筈だ。日本から来る時はバリのバンドとセッションでもしてみたいと考えていたんだが、どうでも良くなってしまった。ロスメンをチェックアウトすると路地の突き当たりにマニックが待っていた。何でここにいるんだ、と聞くと、早く着いたから荷物を持ってあげようと思って待っていた、と言う。いいタイミングだな、じゃあこいつを頼む、と彼にバッグを一つ渡す。どうもマニックの様子がおかしい。さっきビーチであった時のいい笑顔はどこへやら、表情が固いし、何だかやけに空々しい。「どうしたんだ？様子がおかしいぞ？」「嘘をついてごめん。俺、実は30分前からあそこで見張ってたんだ。」「なんで？」「あの～、約束をまもってくれない日本人が多いんだ。何時にここでって言っても来ないし、ホテルまで行ってもチェックアウトしてたりするんだよ。」「他の奴等の事は知らんが、俺がそんな事すると思ったのか？」「ん、ごめん。」彼の車は決して上等とは言えない代物だったが、正直な奴だし話も面白いので全く苦にならなかった。途中で英語のわからない彼のボスとやらも乗ってきて、インドネシア語を交えて馬鹿話に花が咲く。前の車が急にUターンして危うく事故になりそうになった時も、皆んなで中指を立てて、「ＨＥＹ！　ＦＵＣＫ　ＹＯＵ！」てな調子の、軽い乗りだ。ガイドブックであたりをつけた目的のホテルは、ウブドの中心部から１キロちょっと離れた村にある。急な坂を登り切った場所に建っているので、ここまででいい、と坂の下で降りようとしたのだが、マニックは、いや門の前まで行く、と強引に車を出す。ゴリガリゴリガリと凄い音をたててスズキのジムニーは登っていく。壊れても知らないぞ。ホテルのフロント脇のロビー（と言っていいんだろうか）には、従業員だか近所の奴らだか、10人位の地元民がテレビを見ながら寝そべっていた。客が来たからって全員が立ち上がる様な事は無い。その方がこっちも気が楽だ。比較的歳の若い二人の応対で部屋を二晩予約する。4つ程度客室のある3棟の建物が広い中庭を囲む様にして建っている。部屋も悪くない。他にどんな奴が泊まっているか聞くと、誰もいない言う。ホテル一軒俺の物だ。トイレットペーパーが無かったので、従業員に持ってきてくれる様に説明するのだが、どうもうまく通じない。バリ人は左手で拭くそうだが、まだ私にはそこまでする程の度胸はない。「だから、トイレで×××した後に使うものだよ。わかる？」「…ああ、わかった。」なんだか今一つわかってない様子で持ってきた物は石鹸だった。そうか。この男の左手は清潔だ。荷解きをしてベランダに出てみる。目の前に広がる田園風景。中庭の池では従業員が近所の子供達と釣りをしている。実にのどかだ。ちょっと腹が減ったので、100メートル程離れた水田の中に建つレストランに食事に行く。ビンタンとナシ・ゴレンをオーダーする。私はナシ・ゴレンが好きだ。ナシ・ゴレン自体よりも、サンバルという辛い調味料とナシ・ゴレンのコンビネーションが好きなのだ。にんにくの匂いが強烈だが、一度好きになると癖になる。私の他に一組だけいたドイツ人のハネムーナーが、こっちに来ないか、と声をかけて来たのでグラスを持って席を移動した。男の方は内気なようだが、新婦は良く喋った。「まだ日も暮れてないのに随分飲むわね。」「んー、こいつが好きでさ。それに汗になって出ちまうから余り酔っぱらわないしね。ビンタンは美味しいぞ。飲んでみたか？」「私達、余りビールは好きじゃないのよ。」「え、ドイツ人はビールが好きだって聞いていたけどな。」「別に皆って訳じゃないわよ。それに昼間は飲まないわよ。」「ドイツの自動車工場の昼食でビールが出ているのを、テレビで見た事があるぞ。」「えーっ！そんな所あるの？」どうやら私のドイツ人に対するイメージには、偏見があったらしい。レストランを出て、ちょっと街の雰囲気を掴むためにぶらぶらして帰ってきた時には、もう暗くなっていた。先程のレストランでウイスキーを2、3杯飲んで今日はおとなしく寝る事にした。その夜。寝苦しいので目が覚めると体が動かない。金縛りって奴だ。何回か経験した事はあるが、まさかバリくんだり迄来て、金縛りに遇うとは思ってもみなかった。声を出そうと思っても出ない。そのうち右手が勝手にベッドと背中の間に入っていき、これ以上は行かないという所で、ぐいっ、と何者かに引っ張られベッドの上で一回転してしまった。悪い夢でもみて寝返りでもうったんだろう、と思うんだったら、仰向けのまま回転してみろ。出来る訳が無い。助けを呼ぼうと思って大声を出したつもりなのだが、蛙の鳴き声しか聞こえてこない。気が付くと私は天井近くに浮遊していて、ベッドの上で叫ぼうとして大口を開けている自分を見ていた。幽体離脱までしてしまったのだ。この時は自分が死んだと本気で思った。後になってから土地の者に、このあたりで金縛りに遇った、と話したら、やっぱりね、と納得していた。この辺りは魔女が出没する為、無闇にホテルなんか建てちゃいけない場所で、そんな話はしょっちゅうなんだそうだ。ある女性の旅行者が、寝ていると何者かに犯され、それもエクスタシーに迄達して、それが毎晩だから疲れてしまう、と言っていたそうだ。俺もそっちの方が良かったな。どのくらいの時間が経ったのかわからないが、解放されて起き上がった時には全身汗まみれだった。あまりにも怖いのでしばらく起きていたが、とうに精神力の限界を過ぎていた。もう、どうなっても構うもんか、とウイスキーのポケット瓶をあおり、そのまま寝てしまった。めでたしめでたし。



第２章
俺に聞くな。

毒々しい色合いのジャムがっとりへばりついている、かちかちんのトーストの朝食を無視出た。今日はウブドに来た観光客は必ず訪れるという、観光名所モンキーフォレストに行った後に、バリ狂いの私の弟がウブドに来ると必ず泊まり、家族同様の付き合いをさせてもらっていると言う宿の主人に挨拶して、夜はいよいよ念願の本場のガムラン音楽のパフォーマンスを見る予定だ。ラヤ・ウブド通り、モンキーフォレスト通りでは、いたる所で道路工事をやっており、雨期だというのに埃が物凄い。トラックが通ると目を開けていられない程だ。モンキーフォレスト通りは土産物屋、カフェ、レストラン等が軒を連ねているが、クタの様な騒々しさは無い。歩いていても声をかけてくるのは白タクの運ちゃんぐらいだ。ウブド・パレス近辺では、５メートルおきに「ヘイ、トランスポート？」と、呼びかけられ、鬱陶しいなー、と思わないでもないが、ウブドにはメータータクシーが無いので、必要になった時に彼らがいないと困る。他にはときたま土産物屋の店番が、ちょっと覗いていってよ、と手招きする程度だ。クタと比べると袖をひっぱる様なしつこい奴はいない、と思っていたら、実はいるんだそうだ。事情通に聞いたところによると、私が観光客に見えなかったから声をかけられなかっただけじゃないかと。確かに他の観光客は短パンにＴシャツ、それも『Ｉ ＬＯＶＥ ＢＡＬＩ』なんてプリントされているのを着ている奴が幅をきかせているし、なかには上半身裸の奴もいる。田舎町でもしっかりリゾートしている訳だ。人前に肌を晒してはいけない、というジャワ本島のイスラムの戒律を押しつけられているバリ人にしてみれば大顰蹙だ。ところが私の格好ときたらレーヨンか綿のでろでろの長ズボン（！）に開襟シャツ（たまに黒いタンクトップ）といういで立ちだ。これじゃあ大金持っている様にはみえないわな。その通りだけど。モンキーフォレストは、猿の種類が日本と違う程度で、日本にも良くある様な猿公園と特に変わらない。つまらん。やっぱり、観光の目玉なんて、どこの土地でも似たりよったりなんだろうか。それとも、『観光』という言葉の持つ、日常生活のうさ晴らし的なイメージに私自身が否定的な為につまらなく感じるだけで、他の観光客達はここに来て、「ああ、ウブドに（もしくはバリに）来て良かった。」等と感動するのだろうか。そうなると、これは私自身の問題になってくる。つまり、社会生活を営む上で私に蓄積される精神的マイナス要素は、猿を見た程度では解消されない、と言う事か。う～ん。なんでこんな事考えなきゃいかんのか。弟夫婦が滞在していた宿に行く途中、乾いた喉にビンタンをぶつけるべくハヌマン通りのカフェに入る。私の他には客はいない。ちょっと髪の長い従業員が話しかけてきた。私は、長髪にぎょろ目という風貌、更には、だらしない恰好が災いし、「お前、ジャワニーズのジャンキーじゃねえのか？」と、散々クタで言われ続けてきた事を思い出した。よし、先手をとってやろう。「お前、ジャワニーズか？」「いんや、バリニーズだけど？」「髪の毛伸ばしてるのはジャワニーズだけかと思った。」「んー、前はもっと長かったんだけどな、仕事に就けないんで切っちまったんだ。」私は彼をブロックと呼ぶことにした。なんでそういう呼び方にしたのか覚えてないが、殆どのバリ人の名前には個性がなくて、誰がなんという名前だったか思い出せないのだ。それもその筈で、人口の殆どを占めるヒンズーのカースト制の平民階級には４種類しか名前がないのである。即ち、生まれた順に、ワヤン、マデ、ニョマン、クトゥとなっており、じゃあ、５人目以降はどうなるのかといえば、再びワヤンから繰り返すのだ。この名前のつけ方には男女の区別がない。と、いう事は、同じ名前の男女が夫婦になる確率も非常に高い訳だ。ちょっと待てよ、長男長女が結婚して出来た最初の子供も同じ名前になるのか。もしかして同居しているおじいちゃんも長男だったりして。こりゃあ大変だ。五つ児なんか生まれた日には何がなんだか分からなくなってしまう。いたるところにワヤンやマデがいる訳で、実際、後で知り合ったバリ人の家にいた二人の使用人は両方共マデだった。主人が「マデ！」と呼ぶと、二人共出てくる。ややこしい事この上無い。子供も二人いたが、幸いカースト制の上位階級の家庭だったので最悪の事態は免れていた。地図で見ると、目的地は、この辺までがウブド、という最南端に位置する。結構遠い。途中、レストランで昼食を摂りながらビンタンを飲んで一休みだ。本当に良く飲むな、と思うかも知れないが、本当に良く飲む。しかし、これがビールだからそう思う訳で、あの炎天下を２キロも歩いてみろ。誰だって屋根のある所で冷たい物を飲みたくなる。多くの旅行者が下痢に悩まされるバリで私が大丈夫だったのは、雑菌だらけの水道水から作った氷の入ったジュースがわりに、ビールを飲んでいたおかげなのだ。嘘じゃないぞ。細い路地の突き当たりにある目的の宿は、バリ人の主人とドイツ人の奥さんの経営を二人の使用人が手伝っている、たった４部屋の小さいホテルだ。（主人は、ホテルじゃないホームステイだ、と言っていた。）つい２、３カ月前、新婚旅行でウブドに来た弟が撮影してきたビデオを見たが、結構いい感じなので部屋さえ空いていれば滞在してみたいと思っていた。それに主人のニョマンはギター好き、私も好き。彼とビールでも飲みながら盛り上がるのも

悪くない。誰かいませんか、と声をかけると、ビデオで見た事のある奥さんのウリが出て来た。ご主人にお目にかかりたい、と言うと、今仕事場にいるという。ニョマンは画家でもあり、ホテル内にギャラリー兼アトリエを構えているのだ。少ししてビデオで見た事のある顔が出てきた。俺の絵が見たいのか、それじゃこっちに来てくれ、と案内するその後を、これもビデオで見た事のある５歳になる彼の息子が追いかける。弟から聞いてダニエルという名前は知っていたのでちょっとからかってみる。「可愛い子供だね、俺だったらダニエルという名前をつけるんだけどな。」「え、そうだ。こいつはダニエルって名前なんだが、知っているのか？」「ん。ビデオで見た。」「え？」「俺の弟が世話になったみたいだね。」「あっ！ひょっとして、ヤスシキの兄弟なのか？（私の弟は、やすしと言う。）」ウリは、どうりで似てると思ったわ、と納得している。似てるのだ。ビールを飲みながら暫く雑談をした後に空き部屋を見せてもらう。シャワーは水しか出ないが割と部屋は清潔で、テラスのソファーも楽に８人は座れる大きさだ。ドイツ人の奥さんの趣味だろうか、ベッドカバーやクッションカバーは明るい色調で統一されていて、（手作りである。）ちょっとメルヘンチックだ。むさくるしい男が一人で泊まるにはもったいないが、気に入ったので明日から５日間の約束をして、ホテルを後にした。滞在先に戻る途中でアントニオ・ブランコ邸に寄る。ブランコ氏は長年パリで創作活動を続けているスペイン人の画家で、彼の豪邸の一部がアトリエ兼ギャラリーとして一般に公開されている。来日した事もあり、私の好きな画風のシュールリアリストだ。ちょっとした美術館並のギャラリーにかかっている超現実的な絵を舐める様に見ていると、どたどたと写真で見た事のあるお爺さんが入って来た。ブランコ氏本人である。「今、集金が来てるからちょっと待ってて。」なんだかやけにリアルだな。ホテルに戻り、シャワーを浴び暫くしてから再び出かける。いよいよ念願の本場のガムランのパフォーマンスが見られるのだ。この為にパリに来たと言っても過言では無いのだが、思った様なクオリティのパフォーマンスが見られなくて失望しかかっていたのだ。しかし、今日こそ見れるのだ。期待に胸が膨らむ。30分程早く会場に着くと未だバンドも客もいない。気が短くて、待つ事が大嫌いなのにフライングしがちなのは私の悪い癖である。ちょっと腹が空いている事に気が付き、地元民しか来ない様な近所の食堂に入る。勿論、ビンタンでナシ・ゴレンをぐいぐい胃袋に流し込むのだ。やっぱ、ナシ・ゴレンにサンバルは最高だな、なんて思いながらテーブルの上に置いてあるサンバルをかけるんだが、どうも今一つにんにくのききが足りない。無くなりかかっていたボトルを使いきってしまうと客の一人が、こいつを使え、と新しいサンバルを持ってきてくれた。トゥリマ･カシ、なんて言いながらたっぷりかける。すると、か、か、か、辛い。ヒー。今まで俺が使っていたのは何なんだ。空になったボトルのラベルを見る。『トマト・ケチャップ』見た目は変わらないじゃないか。同じボトルに入れるなよ。ヒー。ヒーヒー言いながら会場に戻ってみると、まだ真っ暗だ。開演まで５分しか無いのにいくら何でもおかしい。場所を間違えたかなと思い、ワルンにたむろしていた地元民に聞いてみたが間違いない様だ。そのうち観光客が集まりだした。皆首を傾げている。丁度ステージの裏手の方からそれらしい恰好をした男が出て来たので、捕まえて聞いてみる。「今日、ここでパフォーマンスをやるって聞いて来たんだけど。」「今日はやらないよ。」「え、毎週月曜日にやるんだろ、今日は月曜日じゃないか？」「でも、今日はやらない。」「観光案内所でチケットも売ってたぞ。」「でも、今日はやらないんだ。」何てこった。ざわざわやってるオージー達に教えてやらなきゃ。「おーい、今日はやらないんだってさ。」え、どうしてどうしてなんて俺に聞くな。又、肩透かしをくらってしまった。このやるせない気持ちはビンタンに慰めてもらうしかないだろうと思い、ホテルに戻る途中のレストランに入ると、他に客はオージーの兄ちゃんが一人だけ。こっちをじろじろ見るので、軽く手を挙げて、やあ、と挨拶すると、フンとばかりに横を向いて無視しやがった。この野郎、むかつく奴だな。どうも今日はついてないな。こんな日は酔っぱらって寝ちまうに限る。そうだそうだ、飲んじゃえ飲んじゃえ。

- つづく -

DARI JEPANG

日本語なんて話さなくてもいいです

井上　佳子

そもそも私がウブドという村の存在を知ったのは、12～3年程前でしょうか「地球風俗曼陀羅」という写真集を御存知かもしれませんが、この本の中でウブドの美しいライステラスと美しいバティックを身に付けて稲刈りする人々を見て“いつかこの人達に会えたらなア、この目でライステラスを見たいなア”と思ったものでした。（この写真集は、今でも私の最も大切な、そしてある意味で私の意識を変えた本なのですが…）

そしてそれから10数年が経ち、今回一人でどこかを訪れようと思った時“そう言えば”と思い出し、迷わずウブドと決めました。ろくに英語も話せない上に、一人旅など恐れ多い事だと思いつつ“ここならきっと大丈夫、いい旅が出来る”と何故か安心していたのは、今にして思えば“私も彼らもルーツは同じだから大丈夫”とどこか心の底で勝手に思い込んでいたからでしょう。そして、実に楽しい旅でした。考えさせられる事も多く、良い経験となりました。私はごくわずかな日々を旅行者として過ごしただけですので、当然、良い面しか目にしなかったとは思うのですが、その限られた範囲の中で感じた事は“彼らの豊かさ”でした。言葉が違っているかもしれませんが、もちろん経済的な豊かさではなく、もっと精神的なものとでも言うのでしょうか…。正直言いまして、私は彼らがうらやましかった（彼らは私達旅行者をうらやましがっている様ですが…）。

バイクでライステラスを案内してもらい、田んぼの中のあぜ道を走り貫けながら、ただ漠然と“この国にはかなわないなア”と思い、何故か日本が乏しく思えて仕方ありませんでした。お互いに助け合い、声を掛け合う近所の人々がいて、素晴らしいアートや伝統的な儀式がしっかりと生活の中に残り、人々は定められた領域の中で、ゆったりと、自然体のままに暮らしている様に、私には見えたのです。これは単に、隣の芝生が青く見えただけなのかもしれませんし、先程言いました様に私が目にしたものは、それでもかなり観光化されたものかもしれません。そして彼らの親切が善意からなのか、又はそうではないのか。…そんな事を考えながらの旅となりました。

今、日本ではちょっとしたバリ・ブームで雑誌などでも特集されたりしていますが、このブームによって、バリが俗っぽくならない事を望むばかりです。ウブドに滞在中に会ったバリニーズからたびたび聞いた言葉は“日本語をもっと勉強したい”“日本へ行きたい”…等々でした。そのたびに私は心の中で“日本語なんて話さなくてもいいです、日本語でなくても、思いはある程度通じますよ”などとつぶやいておりました。私は彼らが日本語を話すことによって、バリらしさを失ってしまうのではないかと、勝手な心配をしてしまうのです。彼らにとって日本語は、収入など特別な意味を持つのではないかとは想像できるのですが。勝手な願いを言わせて頂くと、西洋にも日本にも毒されず、少なくとも今のままであって欲しい、と思うのは私だけでしょうか。

イラスト：FUMIO

WAYAN君のADO！ADO！JEPANG

WAYAN君は東京の三軒茶屋に住んでいたことがある。親方に世話をしてもらった二階建木造アパートでの話である。BALIでの生活は同じ敷地内に大家族が狭い部屋にゴロゴロとたくさんの兄弟と体をくっつけるようにして寝起きをしていた。三軒茶屋のアパートは狭いながらも楽しい我が家の一人住まいであるが、一人寝は淋しいような心細いような気持ちでもある。アパート「さくら荘」は土地柄なのか、水商売の女性が多く住んでいる。彼のように東南アジアから来ている女性もいた。彼女達は夕方から出かけて夜遅くに帰ってくる。WAYAN君が仕事から帰ってくる頃に出かける女性も多く、だんだんとすれ違いざまに声を掛け合うようになり自然と親しくなっていった。日曜日にはお互いの部屋に遊びに行くほどの仲になっていた。

●

今日は日曜日、久しぶりの休暇である。部屋のベットで横になっていると、ピンポーンとチャイムの音がし扉の外で人の声がする。日本に親しい友人はまだいないはずなのに誰が尋ねてきたのだろうと不安な気持ちで扉を開けてみると、そこには新聞を小脇に抱えた男性が立っていた。何か話かけられたがチンプンカンプンでまったくわからない。たぶん新聞をとってくれと言っているのであろう。日本語もろくに話すこともできないWAYAN君に、こんな難しい漢字の書いてある新聞が読めるわけがない。WAYAN君が戸惑った顔をしていると、さすがの新聞勧誘員も何か大きな間違いをしたかなという顔をして帰っていった。そのあと化粧品・辞典・保険・車とつぎからつぎへとチャイムを鳴らしてセールスマンがやってくる。BALIの家庭にも物売りは訪問してくるが、こんなに頻繁ではない。もううんざりのWAYAN君は扉を開けることをやめにして、扉についている小さな窓から覗くだけにした。１センチほどの小さなのぞき窓からは扉の外の人の全身が見える、不思議なガラス玉である。外にいる人のほとんどが顔をキョロキョロとして怪しげである。この不思議なガラス玉BALIに持ち帰って、どこかのホテルの部屋に取り付けて覗きでもすると面白いなと少し不謹慎な考えがWAYAN君の頭を横切った。そういえばサヤンにある高級ホテルで覗きのできる部屋があると聞いたことがある。観光客の皆さん少し気を付けた方がよいかもしれませんよ。

しばらくしてチャイムが鳴った。不思議なガラス窓から覗いて見ると、欧米人の２人組の青年が扉の外に立っている。WAYAN君は外国に住んでいる外国人（？）が話し相手を探して尋ねてきたのだろうと思い扉を開けることにした。すると青年はいきなり「あなたは神を信じますか」と言って尋ねるではないか。WAYAN君は敬虔なバリ・ヒンドゥー教徒である。「もちろん神は信じます」と胸をはって力強く答えると。青年は「今度ここへ来てください」と一枚のチラシを出して見せた。そのチラシには、彼らの宗教に入信しませんかというすすめのようである。宗教の訪問販売にWAYAN君も驚いたようであるが、気を取り直し「残念ですがわたしには心から信じているすばらしい宗教があります」と答え、そして彼らに「バリ・ヒンドゥーに改宗しませんか」と尋ねてみました。すると彼らは、こら～たまらんわいという顔をしてそそくさと帰って行った。日本の日曜日は休みだと言うのになんと忙しいことだろう。休みの日ぐらい静かにさせてくれと願う、WAYAN君の忙しい休日でした。

ぶらっく　まじっく

ロスメンの主人に頼んで、私専用のダプール（台所）を部屋の隣につくらせてもらった。UBUD に、ケーキとコーヒーのお店をつくるのが私の夢。ダプールがあると、その準備に何かと便利なのです。

● ● ●

1995 年 1 月 12 日
それは私のダプールから始まった。

午後 3 時：部屋に戻ってぼ〜としていると、突然ガタガタガタと重いオーブンが揺れているような音がし、目を見張った。少ししてから隣の部屋で鍵を開けるような音がカチャカチャと鳴りだした。隣の部屋には「お客がいない」はずなのにと思っていると、今度はドアをカタカタやっている音がする。鍵もドアも開けるのが下手な人だなと思っていると、やがて音がしなくなった。そしてしばらくして、サクサクと私の部屋の周りを歩く音がしだした。そして再びダプールでガタガタ。隣りの部屋の鍵がカチャカチャ。ドアがカタカタと音をたてる。「これは泥棒か、それとも泊まるところのない人が入ろうとしているのか」と思い、少し怖くなってきた。その瞬間、私の部屋のドアにドシンと体当たりしてきた。ドアに小石のようなものが当たるピシッという音。テラスに何か潜んでいる気配がし、しばらくするとスッと気配がなくなる。怖い気持ちを押さえて眠りにつく。しばらくうとうとすると、また今までと同じ音が繰り返される。もし私の部屋に侵入してきたら、大きな鍵をぶつけて反撃してやろうと、右手に鍵を持ってベッドで身構える。とうとう明け方の 3 時まで眠れず。空が明るくなり始める 5 時にはベッドを飛び起きて、隣の部屋をそお〜っとのぞきにいく。隣の部屋の錠前は以前から、ひっかけてあるだけで鍵はかかっていない。それなのにどうして…。ドアに何かが当たった形跡はない。歩き廻った足跡もない。音だけだったのか。

ロスメンの主人に昨夜の体験を話し、もっと鍵を取り付けてほしいと頼むと、主人は「それは鍵の問題ではなく、スピリッツの問題だ」と言って去っていってしまった。怖い体験をしたのは私なのに。この不思議な音はこの後も数日続いた。

2 月 4 日
私のダプールでウパチャラが行なわれた。

私がロスメンのイブにダプールにも魔除けの白い布をつけてほしいと頼むと「そういえばミチコのダプールのウパチャラはまだだったね。すぐにでもウパチャラに良い日を調べてもらおう」と言って、百才にもなる高僧に見てもらいに出かけていった。高僧の返事は今日が一番良い日とのことでさっそくバンタン（供物）の用意がされ、デンパサールから司祭にきてもらい、午後 6 時ウパチャラは、雨の降りしきる中で行なわれた。急なことでイブは支度におおわらわのようであった。流し台の上に祭壇が置かれた。これは洗い物をする時に頭にぶつかり、私には困りものだ。ガスオーブン、ガスコンロ、冷蔵庫にバンタが置かれ、呪文が唱えられ、聖水がかけられ、お祈りが終わった。「ミチコ、これで大丈夫。悪いものはもう入ってこれないから」とイブに言われて、一安心。

いろんなところからの物音はもうやめてほしいです。顔に冷気をかけるのもやめて。でもおかげで少し痩せたようです。ラッキー！

２月５日
バリアンにみてもらいに、BANGLI に行く。

バリアンは 60 才代の女性であった。知性的な顔だちが信頼できるようにみうけられた。修業のため丸五年間、水と少しのお米で過ごしたこともあるそうです。このバリアンが言うには、私は祖先に守られていて、神と祖先に毎日お祈りをすると、邪悪なものを押し出すパワーをそなえているそうです。そして良いバリ人にもなれ、色々な霊に好かれるタイプらしい。今度の不思議な体験は嫉妬によるブラック・マジックだと言う。注意人物は私の友人の中にいるとのこと。名前は言わなかったが、その特徴はまさに私の仲の良い友人の一人にぴったりだった。実はその友人は、私のとっても好きな人。彼は私の髪の毛を一本でも持っていると、自由にマジックをかけることができるブラック・マジシャンなのだそうだ。最近私は四人のバリニーズの親衛隊がいる。彼はそれを嫉妬しているのだろうか。

２月６日
朝ダプールの前の敷石にヘビの死体が置いてある。

ダプールの前には、コンクリートで造った敷石が二枚あり、一枚には私の名前が堀り込んである。その私の名前の上にヘビの死体はあった。ゾクゾクと悪寒が背中を走った。このヘビは毒をもっている危険な緑色のヘビらしい。このロスメンには、緑色のヘビはいないとロスメンの主人に聞いたことがあったが、あれは嘘だったのか。ヘビは首を何かでつぶされ、切断され、頭と胴体が少し離れて置いてあった。誰かが故意にしたように思われる。やはりブラック・マジックなのか。私の死を予告しているのか。それともヘビは私の身代わりで、危険なものはもう殺したので、大丈夫だとでも言うのだろうか。不吉な気分になってしまう。

２月 10 日
夜スカワティのバリアンに会いに出かける。

よほど人気のバリアンなのか、たくさんのバリ人が順番を待っている。少し待って私の番がきた。上半身を裸になるように言われた。たくさんのバリ人がそばにいる。塀からのぞいている人もいる。恥かしかったがそうも言ってはいられない。勇気をだして裸に…。

ここもバリアンは女性である。ご主人と娘さんがお手伝いをしている。バリアンは私に何かをする時、一瞬眼が見えなくなるようです。眼が見えないのに火のついた線香の束を持って、私に何かをしようとする。その火が体に近づくので、私は思わず怖くて体が逃げてしまう。すると後からご主人が私の体をぐっと力強く押してくる。神からのパワーを授かったバリアンの右手が私の顔に当てられ、息を二回吹き掛けられ、油のようなもので顔に何かが書かれた。11 種類の色の花が入った器には聖水が入っている。それを頭からザアーザアーとかけられた。マンディをしたように全身びしょ濡れです。

私の身に起きた不吉な現象はブラック・マジックではなく、ガマンというバリの妖怪が私に悪戯をしているのだとそのバリアンは言う。バリアンから貰った油を両足に十字に塗れば、もうガマンは出ないと言われた。私は安心してロスメンに帰った。ロスメンのイブは毎日欠かさず供物を供えてくれている。今は静かで穏やかな生活が続いています。

Ubud Buku Catatan Harian

1993.10.3～1993.10.15

4

ウブドの日記

取材・文
西村久美子

■ 10月13日（水）

8時に目が覚めた。夕べ、アラックのライスワイン割りを1杯飲んだだけなのに胃が重い。おまけに、明け方金縛りにあってしまって少々寝不足だ。隣に誰かの気配を確かに感じたのだ。私は、東京でも時々金縛りにあうが、今朝のはいつものより深いというか、引きずり込まれるような恐さがあった。お湯をもらってインスタント味噌汁を飲むが、イマイチ食欲がわかない。ゆで卵とフルーツだけに手をつけて胃をなだめる。朝食の席で、夕べ日本からやってきた吉田祐子さんと話をする。彼女は派遣会社で半年働いては、後の半年を旅で過ごすという女性だ。モロッコ、メキシコ、中国、エジプト、ジャマイカ…と世界各国を訪れているようだ。今年は不景気のせいで仕事が少なく、サラリーに見合った5日間しか旅のプランが立てられなかったとか。今回は一人旅で、中華航空を利用していったんタイペイに行き、そこでお祭りを見てからバリに来そうだ。「ここは快適でいいですよね」と言う彼女の言葉に、私たちと同じ価値観を持つ女性と分かり、安心する。今夜のパヤンガンのお祭りのことを話すと、ぜひ一緒に行ってみたいと祐子さん。それなら、クバヤと、サロン、帯が必要だと私たちが言うと、彼女は一式揃えたいと言う。オーダーメイドでは今夜のお祭りに間に合わないので、祐子さんは、イクちゃんと一緒にパサールに行くことになった。部屋を掃除しに来てくれた小さいワヤンちゃんが、今日は「ポン」はしないの？としきりに聞く。どうらやセブンブリッジがすっかり気に入ってしまったらしい。もしかしたら、「ポン」という名前に変わったセブンブリッジが、これからウブドゥではやるかもしれない。11時頃、キーボー、メグミと3人で、オカカルティニのプールへ。5往復した後、木陰で本を読んでいると、突然激しい雨が降ってきた。スタッフ用の作業場に逃げ込んで、セブンブリッジをしながら雨宿り。ホテルのスタッフが珍しそうに私たちのゲームを観戦していた。雨が上がったので再びプールサイドに出て肌をやく。3人ともけっこういい色になってきた。キーボーはお腹のあたりが小麦色で、腹黒い状態になっている。普段から色黒のメグミは、特に足の甲が真っ黒。私はなぜか、手の甲が赤銅色だ。1時にプールを引き上げて、トロピカーナでランチ。イカのフリッターやカレー、ナシゴレンを頼む（2万2110Rp）。ここのカレーには、日本のなますそっくりのピクルスがついていて、これがビールのつまみにいい。バリのトマトはスープに最適だと分析するキーボーは、最近トマトスープに凝っていて、どこのレストランに行っても必ずオーダーして味を比べているが、ここのは、すごくクリーミィーでおいしかった。こんなに「食っちゃ寝」しているのに、昨日Sehatiのヘルスメーターで体重を計ったら、私もメグミも体重が減っていた。メグミは、胃が小さくなったと喜んでいる。宿に帰ると、祐子さんがパサールで買って来たクバヤとサロン、帯を見せてくれた。色白の彼女に似合いそうな薄いクリーム色のクバヤと、矢絣のような模様のバリスタイルのサロン、紫の帯だ。雨がまたまた激しくなってきた。キー

ボーは昼寝。メグミと私は、出かけるのを中止した祐子さんと、マディちゃんの４人で、テラスでセブンブリッジ。小さいワヤンちゃんは、英語の学校に出かけていて留守だった。何ゲームかしているうちに、雨はテラスにまで吹き込むほどのどしゃ降りになってしまった。気温も低くて肌寒いくらいだ。女性３人で私の部屋に逃げ込んでおしゃべりをする。世界各国を旅している祐子さんの話は、面白いエピソードに満ちていて飽きない。6時過ぎ、早めの夕食を食べに、イクちゃんおすすめの店「SONY」へ連れていってもらう。ちょうど停電で、ロウソクの灯りの下で食事。ナシゴレン、ナシチャンプル、トマトソースなどを食べたが、どれもすごくおいしい。インドネシア料理は初めてという祐子さんも、全部平らげている。ビンタンも頼んで５人で１万8800ルピアという安さに満足。今夜から、ここが私たちの吉野屋になった。宿に戻ってシャワーを浴び、お祭りのための着付けをする。キーボーもジケット・サパリを着て、サロンとサプッティを巻き、ウダンを頭に着ける。イクちゃんが着付けの先生だ。日に焼けたキーボーに、このスタイルはなかなか似合っていた。おまけにジケット・サパリはイクちゃんからのプレゼント。夕べキーボーが、腕からはずした自分の時計を彼に贈っていたので、そのお返しだろうか。こういう考え方はすごく日本人に似ていると思う。イクちゃんもお祭り用に正装して、全員準備完了したが、雨はまだ止まない。パヤンガンへ行くのは中止にして、着替えようかと相談していると、イクちゃんが「せっかくきれいな格好をしたのに、すぐ脱いでしまっては女の子がかわいそう」と優しいことを言ってくれる。ここから車で10分ほどのバトゥアンでもお祭りをやっているはずだから、そこに出かけてみようということになった。さっそく車で出かけたが、バトゥアンに着いてみると、雨のためか集会所には椅子が並んでいるだけで何も行われていない。ダンスが見られるのは明日のようだ。でも、この衣装を着ていったおかげで、お寺の中を見せてもらうことができた。いったんSehatiに戻り、伊藤さんに今夜はパヤンガンへは行かないことを伝えようとしたが、宿の電話は使えないらしく、一番近い公衆電話も故障中とのこと。再びイクちゃんに車を出してもらって影武者へ。白い装束で準備していた伊藤さんに事情を話して宿に帰った。テラスでイクちゃんとビールを飲みながら少し話をする。イクちゃんは、タカシとタッちゃんは本当にただの友達なのかとしきりに確かめる。二人は、私とカズ、キーボーとメグミがカップルなので、便宜上部屋をシェアしていただけなのだが、なにもない男女が、同じ部屋に泊まるということが信じられないようだ。しばらく話し込んでお休みなさい。さっき、突然時計が止まってしまったので、今が何時なのかわからない。でも、ここではなんの不都合もない。

■ 10月14日（木）

晴れている気配で目が覚める。外に出てマディちゃんに時間を確かめると8時15分。夕べはぐっすりと眠れたようだ。今日の朝御飯は、トマトと薄焼き卵、チーズのサンドイッチ。夕べキーボーが、このメニューが一番好きだと話していたのを、イクちゃんが覚えていたらしい。一人旅のドイツ人のオジサンと同席したので少し話をする。50代後半くらいにみえる彼は、３年前にもSehatiに泊まったことがあり、今回もその時と同じ部屋に滞在しているのだと話していた。イクちゃんが、コーラルオレンジのポロシャツ、ストレートジーンズ、革のデッキシューズという、ヤケにこざっぱりした格好で

やって来た。かすかにオーデコロンの香りもさせている。彼は今日、祐子さんと二人でキンタマーニからベサキのほうへ出かけるので、おしゃれをしたらしい。朝のうちの雨が上がると蒸し暑くなってきた。テラスで本を読んでいると、午前中の仕事を終えてマンディをした小さいワヤンちゃんが「ポン」しようとやってきた。マディちゃんも加えて5人でセブンブリッジ大会。おっとりしているマディちゃんが捨て牌に悩んでいると、気の短いワヤンちゃんはマディちゃんの手を覗きこんで、勝手に捨ててしまう。負けると体全体で悔しさを表現する彼は、かなりの負けず嫌いだ。お昼を過ぎたので、ランチに出かける。モンキーフォレスト通りにある「Cafe Tirta」に入ってみた。アップルケーキやパイナップルパイ、ココナッツパイなど、ケーキが充実したお店で、ラッシーも色々置いてある。ナシチャンプルを頼んでみたが、レイアウトやボリュームが上品で女性向きな感じだ。ただ、トマトスープは水っぽくてイマイチだった。デザートにパイナップルラッシーとチョコレートアイスクリームつきのココナッツケーキをオーダー。ラッシーはヨーグルトが足りない感じだが、アイスクリームが超美味。全部で1万9525ルピアだった。ランチの後、キーボーがマディちゃんとバイクで出かけていったので、メグミと私はヤッチーをして時間を潰す。私は6ゲームのうち、なんと4回もヤッチーを出して絶好調だ。夕方、シャワーの後早めの夕食をとりに、新・吉野屋「SONY」へ。サテアヤムがすごくおいしい。サテが大好きなカズにお土産にしたいくらいだ。モヤシやニンジン、肉を辛めに炒めたものをお好焼きの皮で包んだようなスプリングロールもおいしかった（1万9700Rp）。宿に戻り、クバヤとサロンを着て、お祭りに行く準備をする。サロンの巻き方にも慣れてきた。祐子さんは大きいワヤンさんの妹さんに着付けをしてもらって待っていた。8時過ぎ、バトゥワンのお寺へ。今日のお祭りは、親族の間で開かれるプライベートなセレモニーのようだ。寺院に着くと、正装した人々がたくさん集まっていた。お揃いの黄色いクバヤを着た小さな姉妹、頭をオダラン結いに巻き上げた女性たち。祭壇には果物が飾られ、ガムランの奏者たちが演奏を始めている。しばらくすると、人々が祭壇に向かって正座し始めた。線香が回され、司祭が教典をあげる。お香の匂いが立ちこめるなか、地べたに座った人々が頭の上に手を掲げ、お祈りをし始めた。私たちも、イクちゃんに教わりながら、セレモニーに参加させてもらうことになった。線香の煙で清めた花びらを両手の間にはさんで拝む。何回かそれを繰り返すと、女性の司祭が聖水を持って私たちの前に立った。右手を上にして水を受け、飲み干す動作を3回繰り返す。4回目は頭にふりかけ、5回目はその水を顔になすりつける。そして、配られたお米を、額、左右のこめかみ、喉にはりけて、儀式は終わった。イクちゃんが教えてくれるものの、初めてのセレモニーに私たちは戸惑ってしまった。特に、左手を使わないように注意するのが大変だ。ヒンドゥー教徒でもない異邦人を受け入れてくれたバリの人の懐の深さに感謝。儀式が終わると、ダンスが始まった。割れ門から6人の少女たちが入場してくる。小さい子はまだ6歳くらいだろうか。踊り方はつたないものの、一生懸命踊る姿が可愛らしい。踊り終わって外に出るとき、出口を間違える子もいて、見ている人たちから笑いが起こった。イクちゃんに聞くと、今日の踊り手は、みんなこの一族の子供たちだそうだ。出しものが進むにつれて、ダンサーもローティーンから、ハイティーンへと、だんだん年齢が上がっていくようだ。中学生くらい

の少年少女が踊った「Tombak」は、ジュニア・ハイスクール部門という感じ。見ている仲間から冷やかされて恥ずかしそうに踊る男の子や、衣装がずれて胸が見えそうになるのを気にしながら踊っている女の子がいる。ダンスが終わると同時に、争うように割れ門の外に消えた姿が微笑ましかった。今まで見たことのないダンスも見られたし、なにしろ神聖な儀式にまで参加させてもらって、祐子さんも私たちも感激して会場を後にした。宿に戻り、イクちゃんとビールを飲みながら話し込む。話題はいつの間にかバリに伝わるホワイトマジックとブラックマジックのことになっていた。ウブドゥやクタにはブラックマジシャンがたくさんいるという。例えば、ある男が金持ちの誰かに嫉妬したとする。あるいは、彼の恋人に横恋慕していたとする。男は、その人をおとしいれようと、彼の写真を持ってブラックマジシャンを訪ね、いくばくかのお金を払って、その人に黒魔術をかけるよう依頼する。マジシャンは呪文をかけ、写真の男の体に痛みを与えたり、病気にしたりすることができるそうだ。真夜中に動物の顔になってしまったり、お腹がふくれてしまった人が実際にたくさんいると聞いて、鳥肌がたつ思いがした。イクちゃんはおじさんが白魔術の使い手なので、彼自身もホワイトマジックを操れるのだそう。そして、黒魔術の人が近くに来ると、頭の後ろが痛くなるのですぐわかると語っていた。そんな話をしていたら、マディちゃんがやってきて、今夜、ナイトマーケットでケンカがあったと報告している。なんでも、マスの村からやってきた男がウブドゥの男とケンカをし、マスの男がカギ型のナイフで首を刺されたというのだ。ナイトマーケットは大騒ぎになったらしいが、そんなとき、警察は殺気立った男たちに恐れをなして近寄らないらしい。今夜は色々な意味で、観光客がなかなか踏み入れられないバリの一面を見た思いがした。バリは不思議な島だ。今夜メグミの時計も止まってしまった。

■ 10月15日（金）

8時頃起床。柔らかな雨が降っている。今日はいよいよ東京へ帰る日だ。ゆったりと外で朝食を食べるのもこれが最後。トマトとチーズのホットサンド、トースト、フルーツをゆっくりと味わう。11時頃、タンパクシリーに連れていってくれるというイクちゃんの運転で出かける。ティルタンプルという聖なる泉を見にいくプランだ。ライステラスの美しい村を抜けて、タンパクシリーに到着。まずは、イクちゃんの知り合いがいるお土産屋さんを覗く。キーボーがTシャツやバティックシャツをまとめ買いしている。ルピアが残り少なくなった私はウィンドーショッピング。ここの商店街には、黒檀の置物や、レース編みを売るお店などが並んでいてなかなか賑やかだ。「Tシャツ5枚でシェンエンヨ」なんて呼び込みをするオバサンもいるので、日本人観光客も多いらしい。買物の後、湧き水を見にお寺の中に入っていった。拝観料は550ルピア。ショートパンツ姿の私とキーボーは、サロンと帯を着けるように言われて1000ルピア払う。入り口に行くと、係の人がチケットは？とキーボーに尋ねている。キーボーは慌てることなく「あそこでお金払ったけどチケット持ってない」と、両手のジェスチャーとコテコテの日本語で説明。ちゃんと通じて「OK」と通してもらえた。何とかなるものだ。お寺のなかでは、サロンを巻いた人たちが2日後に始まるというお祭りの準備に追われていた。オジジやオババがお供えを作ったり、お花をまとめたりしている。ティルタンプルの泉は、昔はマンディの場として使われていたらしいが、今は藻が茂り、どよんとした水を湛えているだけだ。早々と引き上げて、イクちゃんの待つ駐車場へ戻ると、イクちゃんがメグミと私に木彫りのエッグスタンドをプレゼントに、と渡してくれた。さっきのお土産屋さんでこれを見た私たちが「カワイイ！」を連発していたので気を遣ってくれたのだろう。ほんとにありがとう。ウブドゥに戻り、最後のランチを「SONY」で食べる。ここには、元イクちゃんの恋人で今は結婚した女性が働いている。イクちゃんはふられたらしいが、今彼には18歳の恋人がいるんだもの、いいよネ。店の前に止まったベモの運転手が警官に呼び止められていた。イクちゃんによれば、警官は時々ああしてワイロをせびるのだそうだ。ちょうどお昼時なので、そのお金でラ

ンチを食べるのだろうということだ。実際その警官は、私たちが「SONY」にいるうちに2回もベモを止め、ドライバーからガラムの下に隠したお金を受け取っていた。「袖の下」ではなくて「ガラムの下」だ。Sehatiに戻り、昼寝をしてからパッキング。準備を終えて精算をすると、急に所在ない感じになってきた。2週間が長くも感じるし、あっという間だったような気もする。とにかく、私たちのチケットは、今夜9時15分発の成田行き。まだまだここに居たいけれど、出発しないわけにはいかない。6時過ぎ、イクちゃんの運転で空港へ出発。ワヤンさんとマディちゃんにお礼を言い、祐子さんに再会を約束する。マディちゃんが門の前に立って、私たちの車が見えなくなるまで手を振ってくれた。見慣れた町を通りすぎ、車はデンパサールへ向かう。今日の夕焼けは特別にきれいだ。イクちゃんの運転も心なしかゆっくりで、みんな口数も少ない。空港につき、イクちゃんと固い握手を交わしてさよなら。彼は来年、伊東に来るというので、必ず会おうねと約束する。空港に入るまで、車の中のイクちゃんに何度も何度も手を振った。……と、哀愁を漂わせつつフィナーレを迎えたはずだったのに、この日記はまだ終わらない。空港でチェックインを済ませた私たちは、軽い食事とビールを飲むことにした。ルピアの持ち合わせが一番多いメグミがご馳走してくれるという。ハンバーガーとホットドッグ、ビンタンのドラフトを3本オーダーしたメグミは、レジに打ち出された1万8900ルピアという数字を見て逆上した。「SONY」なら4人で豪華なディナーができる値段だ。何でそんなに高いの？と怒りつつも、仕方なく財布を探る。が、お金が足りない！「オカネガナイ！」という彼女のかなきり声が、離れて座っていたキーボーの耳にも届いたそうだ。そして、メグミの隣にいた私はびっくりして、ホットドッグの上にトマトケチャップと間違えたチリソースをいやというほどかけてしまった。結局、メグミは日本円で食事代を払い、その場を離れたが、ルピアが足りなかったことに納得がいかない。さっきまで1万ルピア札が2枚あったはずなのに…。そこで彼女は気がついたのだ。別れ際、イクちゃんへのお礼に渡した3000ルピアのなかに、1万ルピア札が紛れていたことに。善良なイクちゃんは、1万2000ルピアの謝礼を手に入れたことになる。それはいいとして、メグミはショックで放心状態だ。慎ましい金銭感覚に慣れた私たちに、1万ルピアは大きくのしかかったのだった。おまけに、無事バリを飛び立った私たちの飛行機は、ジャカルタ上空まで行って「悪天候のため」という理由で着陸を拒否され、またまたングラライ空港へ引き返してしまった。「また戻って来るからね」という約束を、すぐに果たすことになったのである。

STAFF

コーディネーター／小林恵美（メグミ）
護衛・会計／横山清剛（キーボー）
現地仕切り／斎藤崇（タカシ）
アラック友の会／阿部達子（タッちゃん）
会計・引率／西村一成（カズ）
取材・文／西村久美子

Special Thanks

Ibrahim Yasin（アブちゃん）
I Ketut Sumaja（イクちゃん）
I Made Suteja（マディちゃん）
I Wayan Kardika（大きいワヤンさん）
I Wayan Nurjaya（小さいワヤンちゃん）
そして、この旅で出会ったすべての人たちに
TERIMAKASIH

Bali, 自由を求めて

西条　俊

第2章　アビアン・サリ・コテージ

長髪にサンダル、着ているものは洗い晒しの綿パンツにポロシャツ。一見ピッピー風。なのに彼はどこか優雅さが漂う。そしてネコのようなしなやかさと甘さ、そんなプトラと出会い、プトラを通じてUBUDに接した私は、すっかりUBUDファンになり、Baliを愛してしまた。

プトラと親しくなるにつれ、彼は少しずつ自分のことを話してくれた。特に印象に残ったのは日本に恋人がいること。その恋人をとても愛しているが、今は病気で何ヵ月も会えずにいてとても淋しいといったことである。しかし近い将来、彼女と結婚する予定なのでその為の新居があるといって、私をそこへ案内してくれた。そこはUBUDの中心から少しはずれた閑静な場所でいちめん緑のライス・テラスが拡がっているとても美しいところだった。家は、白壁に明るいグリーンの屋根がかわいらしい。そこがプトラと彼女のスイート・ホームになる予定だ。私はこんな何もない所で少し寂しくないのかなと思ったが、いらぬ心配であることに気付いた。たった二人で、こんな美しい所で愛をはぐくんだら、とてもロマンチックだろう。私はUBUDの中でも一番美しい景色に出会っていた。その時、フッと私もこんな風景の中に家を建て、絵を描いて過ごせたら、なんと素敵なことだろうと想像した。

Baliに来て、毎日が楽しく過ぎていく。“影武者”の伊藤さんや由美さんに親切にしてもらい、プトラの他にもBaliの友人がふえていく。それぞれみんな個性的というか、性格がはっきりしていてクリヤーなのだ。日本人のような、つかみどころのない無表情さではなく、ストレートに、顔に性格が表れている。喜怒哀楽のしっかりした顔なのだ。だからこちらも心が開きやすい。

ある日、プトラは結婚してからの夢を楽しそうに語ってくれた。それはツーリストの為のコテージを建てて、プトラがお客さんにガムランを教えてあげるというものだ。その時、私は半分本気、半分冗談のつもりで、君の家の横にコテージを建てさせてくれと云った。プトラは驚き、それからとても嬉んだ。それからはコテージについての夢を毎日語りあった。しかし互いに大きな不安もあったのだ。プトラは私の言うことを、本当に信用して良いものだろうかと。多くの日本人が一時、Baliの美しさに感激して、そんなことばを口ばしり、Bali人を嬉ばしておきながら、日本に帰ってしまうと、現実に流され、忘れ去って、Baliの人を悲しませていた。私も日本に帰ってから、同じ日本という現実のなかで闘い迷っていたが、私とプトラの出会いを壊したくなかったのだ。それはBaliが私にくれた“自由”を手放

すのと同等の意味を持っていた。幸い“影武者”の伊藤さんたちがなかに入ってくれ、いろいろと世話をしてくれるといってくれたので、コテージを建てることに決めた。1993年5月いよいよコテージの着工ははじまった。そしてその年の8月の末コテージは完成した。コテージの名前は“アビアン・サリ・コテージ”プトラの彼女が考えてくれたのだ。私はその言葉の響きがとても気に入って、一回聞いただけで覚えてしまった。“アビアン”は植物ガーデン、“サリ”は聖なる花の芯、とてもBaliらしく美しい名前だ。私はさっそくBaliに飛び、初めて目のあたりにしたコテージは、日本で云うところのトラディョナル・スタイル。私は感動した。初めてもつ自分の家、がしかしその実感はなかった。むしろ私よりプトラのほうが嬉しそうに、おれ達のコテージが出来たとでも云うように、ふだん感情を表に出さない彼が楽しそうに、コテージの細かな仕上げをしている。新しいコテージのセレモニーも終り、いよいよ“今夜カラ、ふぁ～すとニ西条ガ泊マルノダ”とプトラはまるで、私の妻のように私に気を使い、まだベッドのない二階の部屋に蒲団を敷いてくれた。私はそんなプトラに感謝した。夜、床に着き薄明りのなかで、美しく編み込まれた天井をながめながら、私は初めてBaliに来た日から今日までのことを、まるで映画のスクリーンに映し出された映像のように、いろいろなBaliでの出来事を思い出していた。とその時、やみに二匹の蛍が入って来た。淡いけれど力強い光をはなち、天井に舞う二つの光を見つめているうちに、なぜか急に涙がとめどもなく流れてきた。その蛍に神が宿り、私をそっと祝福してくれているように思ったのだ。私はその時初めて、自分のコテージが建ったことをリアルに感じたのだった。

（続く）　1995・4

Pelajaran 7 最終回

バリ島・星空散歩道

エッ、2000年前、東京で南十字星が見えていた!?

バリ天文教育センター主任講師：青木　満

およそ1年間に渡って連載してきました「バリ島・星空散歩道」。今回をもちまして、第一期講座を閉講する運びとなりました。つきましては、最終回の今回は、今まで懐で大事に暖めておいた、南十字星にまつわる奇想天外の“隠しダネ”と、“南天天体の一等地”をご紹介して、ひとまず筆を置くこととします。

1. 東京でも南十字星が見える!?

さて、あこがれの南十字星であるが、わざわざ海外旅行にでかけずに、日本にいながらにして見ることができないものだろうか。もちろん、プラネタリウムではなく、正真正銘、本物の南十字星を。

南の星座を見るには、南の方に行けばよいのだから、試しに沖縄(那覇）で見てみよう。5月下旬～6月上旬にかけての夜9時頃には、南の地平線すれすれのところに、少し傾き加減に小さなクロスが立っており、まるでキリストの墓標のようにも見える。

ただし、那覇くらいの緯度では、南十字下端のα星は、南中時でも高度わずかに0.7°ほど。南の水平線まで見渡せる海岸での挑戦がよろしかろう。

ところで、東京都でも南十字星が見えるのを、皆さんはご存じだろうか。「いや、そんなバカな。現にウチからは、南の地平線まで見渡せるにもかかわらず、まったく影も形も見えないのだから…」と、ご不審に思われる方もおられることだろう。ところが、ちゃんと見える場所がある。では、どこで？

ヒント：なにも23区から見えるとはいっていない。もちろん、周辺の都下の市町村でもムリでしょう。

＜答え＞実は、東京都には、父島や母島、硫黄島などに代表される小笠原諸島が含まれているのだ。父島列島全域では、クロスをつくる4つの星のうち、一番下のα星が、あと一歩のところで地面にとどかず残念賞。母島列島の南部地域を境にして、かろうじて4つの星すべてが見えるようになる。もっと南の硫黄島（南･北両硫黄島でも可）では、琉球列島南部地域同様、南十字星が地平線(水平線）上をはうように動いていく様子が見て取れる。ただしこの島は、現在、アメリカ軍と海上自衛隊の基地と化しており、一般の日本人の立ち入りが極めて困難な土地になってしまっているのだが…。

東京都は、我々の日常感覚とかけ離れて、想像以上に南北に長いエリアを含んでいたのだ。

2. 2000年前には東京でも南十字星が見えていた!?

今度はもっとまじめな話。今を去ること、およそいわゆる都内（本土）からでも、南十字星がちゃんと見えていたという。これはいったい、どういうことだろうか。パソコン･プラネタリウムでシュミレートしてみると（図1）の通り、確かに、当時の春先には、現在の沖縄や小笠原同様、東京近辺（北緯35～36°前後)

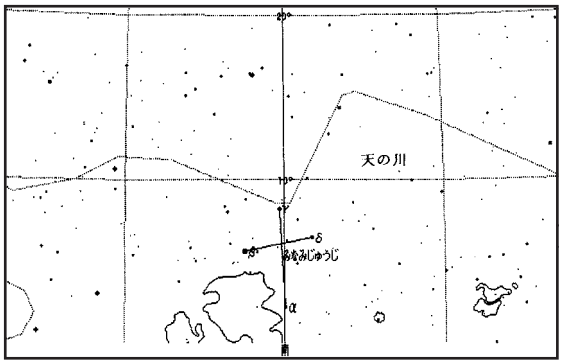


図1：2000年前の東京での南十字

の地域でも、南の地平線すれすれに南十字星が顔をのぞかせていたことがわかる。もちろん、コンピューターの計算違いではない。

この原因を調べる前に皆さんと一緒に、夜空の星々の動いていく様子と、反対になぜ、現在の東京（本土）で南十字星が見えないのかを考察してみよう。

3. 天界の法則

まずは、夜空の星々は、時間がたつにつれて、いったいどのような動きを示すのだろうか。最初はお馴染みの東京での星々の動きを観察してみよう。この場合、星々が動いていく様子を写真に撮ってみると一目瞭然。ただし、カメラを三脚にしっかり固定し、シャッターはしばらくの間、開きっぱなし（バルブ）にしておき、星々の軌跡を撮影してみるとよい。

紙面の都合で写真の掲載は割愛するが、皆さんも学生時代に、理科の教科書でお馴染みのハズ。バームクーヘンの断面のように、星々が弧を描く模様を容易に想像できるだろう。

一見、東西南北、各々の方角で、てんでんバラバラの動きをしているようにも思えるが、実際にはすべての星は、「北極星」（正確には北極星ではなく、現在は約 0.7° ズレた「天の北極」）を中心に東から西へと、一日で一まわりしているのである。この動きを「日周運動」と呼び、地球が西から東に自転しているために起こる星々の見かけ上の動きである。

このことは、なにも東京に限ったことではなく、世界中どこでも同じである。ただし、天の北極の地平高度は観測地の緯度に等しいため、北極星も観測地の緯度にほぼ等しい地平高度（約 ± 0.7° 弱の差は生じるが）に輝いていることになる。東京を例にとると、緯度が約 35° であるため、北極星の位置も北の地平線からおよそ 35° 前後の仰角となる。

ちなみに北緯 90° （北極天）では、頭の真上 (天頂) に北極星が輝き、赤道直下では、地平線上 (高度 0°) に位置することになる。

ではバリ島はじめ、南半球ではどうなるか。緯度は、もはや“北緯”ではなく“南緯”となる。この場合、“北緯マイナス○○° ”と考えればわかり易い。北極星 (天の北緯）は、その土地の南緯に等しい角度だけ、北の地平線下に沈んでいることになる。

前述の通り、星々の日周運動は、地球の自転軸たる“地軸”を無限遠に天空（「天球」という）まで延ばし、北極点の真上の天球と交点が「天の北極」、反対に南極天の真上の天球との交点を「天の南極」と呼ぶ。星々は、これらの 2 点の天球の極を結んだ架空の軸を回転軸として、日周運動していることになる。

4. なぜ東京では南十字星がみえないの？

以上で、夜空の星々の日周運動の様子を理解できたことと思うが、ではなぜ、東京 (本土）では春先に一晩中星空をながめていても、南十字星が昇ってこないのだろうか。

星空をながめたときに見ることのできる星々は、その時刻と観察地点の緯度とによって決まる。皆さんが夜空のもとに立って見ることのできる星は、天球の上半分の星たち。残りはすべて、皆さんの足元、地平線下の楽屋で、一服しながら出番を待っているのであるが、なかには、いつまで待っても出番がやってこないかわいそうな星も存在する。

一般に「星々は東から昇って、西に沈むもの」との頑なな先入観にとらわれている方が多いようだが、一概にそうとはいえないのである。北の空と南の空には、少々趣の異なる星々の領域が存在する。

まず北の空を考えてみると、その特殊な領域とは、天の北極から北の地平線までの角度（その土地の緯度に匹敵する。東京の場合、ここではドンピシャ 35° として考えてみる。）を半径とした領域があげられる。この範囲に属する星々は、決して沈むことなく、北極星の下をグルリとまわって、再び上昇してしまう。これらの星々を“周極星”と呼ぶ。(本誌前号参照)

反対に、南の地平線から（地平線下の）天の南極までの、同じく半径 35° の範囲にある星々は、一番地平高度が上がった南中時でさえも、依然地平線に達することが出来ないために、一晩中、一年中、いや一生涯、その土地からはながめることの出来ない星々となるのである。

これらの関係は、“デッド・ゾーン”と周極星の領域が異なるだけで、世界中で同様。ただ例外となるのが赤道直下と南北の極点。なにしろ赤道直下では、夜空の回転軸が、真北と真南の地平線上にあるため、デッド・ゾーンが存在しない。一年間かければ、すべての星々をながめることが出来ることになる。また反対に、北極点及び南極点では、現在見えているすべてが周極星。いま、見えていない星々すべてが、デッド・ゾーンに属するものとなる。

ちなみにバリでは、天の北極から半径約 8° の範囲がデッド・ゾーンとなるため、バリ人にとっては、海外旅行とまではいかないまでも、スマトラやカリマンタン、スラウェシなどの北部地域にでも出掛けないことには、生涯、北極星をおがめない。

話を戻すが、いま問題となっている南十字星は、東

京（本土）からでは決して昇ってこないデッド・ゾーンに属する星座。ところが、パソコン・シュミレートでも明白なように、いまを去ること2000年ほど前の東京では、この見えないハズの南十字星がちゃんと見えていた。これは、いったいどうしたことだろう？まるで、天地がひっくり返ってしまったような話にも思えてくるが、種明かしの前に、まずは皆さんで、じっくりとからくりを考えていただこう。

5. ニセモノにご注意を！

よく海外旅行でここぞとばかりに有名ブランド商品を買い込んで、ホクホク気分で帰国したところ、後日それらがニセモノ（コピー商品）であったことが判明して、泣くに泣けない悔しい思いをしたという話を聞いたことがある。

ところがニセモノは、何も人間の世界に限られた話ではなく、星の世界にも存在していた。「まったく、どこの世界も…」と、グチのひとつもいいたくなってしまうが、そのニセモノ、なんと、今回の主役、南十字星の“コピー商品”というのだから、なんとも話がうますぎる。おまけに、ホンモノよりも大きく、立派なクロスで輝き、しかも本家本元の隣り組の星座に属しているのだから始末が悪い。

毎年春先には、この“ニセ十字”の被害者が続出し、せっかくの南国でのハネムーンの想い出が、後日偽物とわかってだいなしになったという、気の毒なカップルを筆者も何組か見聞きしている次第。

ハネムーンがワヤになるくらいならばまだ罪が軽い方で、このニセ十字、過去には立派に（？）“殺人罪”をも犯しているのである。実はホンモノの南十字は、南半球の世界では極めて重要な存在。北半球に住む皆さんが、北斗七星やカシオペヤから北極星を探すように、南半球ではこの南十字から「天の南極」を導き出せるのである。“南極星”と呼べるのにたる明るい星がない現在、そして特に、天文航法が用いられていた大航海時代から近代にかけてのその役割の大きさは、計り知れないものがあったことだろう。天の南極は、南十字の縦軸の長さの4.5倍、クロス下端のα星から南に延ばしたところ。（図2）

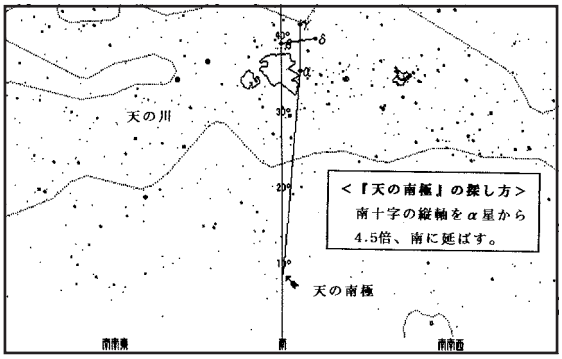


図２：「天の南極」の探し方

このようにして真南の方角を求めて航海していた時代、ある船の水先案内人が、ニセ十字にコロっとだまされてしまい、とんでもない方角に船を進めてしまった。結果は惨憺たるもので、遂には食料も尽き、なんと遭難の憂き目を見るに至ったのである。

いま問題のニセ十字は、ほ座のκ（カッパ）星と同じくδ（デルタ）星、りゅうこつ座のι（イオタ）星と同じくε（エプシロン）星からなり、κ星とε星とで縦軸、ι星とδ星とが横軸を構成している。皆さんも、しっかりとご自分の目でホンモノとニセモノとの区別ができるよう、この機会にぜひ覚えてくださいネ！十字架の横軸を東に20°ほど延ばして、仲良く並んだふたつの1等星、ケンタウルス座α、β星が見つかれば、ホンモノの証。

6. 太陽系に最も近い恒星は…？

我々の太陽系から最も近い（太陽以外の）隣の恒星はというと、先ほど“南十字の証人”として探したケンタウルス座のα星（東側の明るい方）で、その名を「リギル・ケンタウルス」（「ケンタウルスの足」の意。以降、「α Cen」と略す。）という。その距離4.3光年。さすがに近いだけあって、見かけの明るさは、おおいぬ座のシリウス、りゅうこつ座のカノープスに次いで、全天第3位。

ところがこの星、単独の恒星ではなく、一番明るい主星と、望遠鏡で簡単に検出できる少し暗めの伴星。さらに主星から約2°ほど離れたところに位置する「プロキシマ」と呼ばれる11等級の極めて暗い第2の伴星から構成。されている実は、このプロキシマこそが全天で最も太陽系に近い恒星で、その距離4.26光年とされていた時代があるのだが、その後の観測では、やはり主星の方が若干近かったという結果が出て、勝敗が二転三転しているイワクつきの星。まぁ、どのみち、このα Cenファミリーのどれかが勝利することだけは確かなのだが、このように、天体の距離を求める作業は、困難極まるものである。

天文学では、太陽系外の天体の距離を測る単位として、我々が日常使うキロメートル等の単位では、それこそ天文学的数字となってしまい、訳がわからない。そこで編み出されたのが“光年（こうねん）”とい単位。「1光年」とは、この世で最も速い存在である光が、1年間かかって進み距離をいう。光は1秒間に約30万km（地球を

7回り半）進みから、1光年とは、およそ9兆5千億km。α Cenまでは、“最も近い恒星”との歌い文句はあるものの、たとえ光でも4年3カ月と18日ほどもの歳月をかけないと到達できない勘定になる。この事態からも、恒星間の隔たりが、いかに遠いものかが理解できよう。

逆な言い方をすれば、今この瞬間に見えているα Cenの光は、今から4.3年前に発せられたもので、今日現在、本当に無事存在しているのかどうかわからないということになる。ひょっとすると、既にその寿命を終え、とうの昔に爆発してしまっているということも、可能性としては否定できないのである。

仮にそういうのならば、そのことがわかるのは、爆発から4.3年後となる。このように、星の世界はすべて過去の姿を見ていることになる。

現在、最も遠い星は、およそ150億光年ないしは、180億光年先のもので、宇宙開闢（かいびゃく）（ビック・バン）当時の様子を知る“生き証人”といえよう。遠い星ほど過去の姿を現代にとどめているのである。

7. 天界の宝探し

さて、南十字を基点にして、南天天体の宝庫をいくつかのぞき見してみよう。

★謎の天体・η Car（エータ・カリーナ）

さきほど、南十字の横軸を東に20°ほど延ばしてケンタウルス座のふたつの輝星α星とβ星を探したが、今度は反対に、横軸を西側に20°ほど延ばしてみよう。すると、なにやらモヤモヤとした雲状の天体が認められるだろう。これが「エータ・カリーナ星雲」と呼ばれる、南天天体のなかでも極めて有名な存在である。星雲自体の見かけの大きさ(視直径）は、満月の優に6倍もあり、そのため、肉眼でもかなり明るくもやっている様子が容易に見てとれる。

肉眼や、双眼鏡･望遠鏡でながめる分には、ほのかに青白く感じられるが、カラー写真に撮ってみると、赤っぽい星雲の広がりが写しだされる。これは、星雲内の水素ガスによる発色のイタズラによるもので、このような水素ガスからなる星雲に共通な特徴。

ところで、この星雲のほぼ真ん中に、肉眼でかろうじて見えるかという6等級の、まるで星屑のような星がポツンとある。その名こそ､「エータ･カリーナ」(りゅうこつ座　η（エータ）星)。実はこの星、今でこそ肉眼星としては最下位の地位であるものの、一時期は、なんと、全天第2位のカノープス（-0.7等級）にせまるまでの明るさに増光した歴史がある。

近世新設星座の創設者の一人、バイエル(1572-1625)は、η星が4等級、1827年には、遂に1等級をマーク。1837年12月16日には、オリオン座のリゲル（0等星）よりも明るく輝いたため、ジョン・ハーシェル（天王星発見者ウィリアム・ハーシェルの息子）を驚かせたほどである。

その後、1843年3月に新記録を更新してカノープスに並び、1860年に3等級、1866年には6等級、19世紀末には、もはや肉眼では検出できない8等級にまで減光。今世紀にはいって、数回の増光があったものの、現在は1967年の増光の結果、かろうじて“肉眼星”の地位にしがみついているにすぎない。

夜空にあまたある星々のなかで、まったく明るさを変えない星は以外に少なく、大なり小なり、明るさを変えない星（変光星）は、これまた意外なほど多い。しかし、η・カリーナほど極端かつ大胆に、明るさを乱高下する天体は例がない。これが為替相場なら偉いことだ。いったいどういうメカニズムによるものか、その究明は、今後の研究に期待されている。

★コール・サック（石炭袋）

今度は、見えない天体を見てみよう。どういうことかと言うと、南十字は天の川の中に輝いているのだが、そのすぐ東南部（十字架の左下）には、巨大な暗黒星雲が潜んでいるのだ。暗黒星雲については以前述べたので解説を割愛するが、空のきれいなバリでは、天の川の一部にポッカリ穴でも開いてしまったかのように、見えないハズの濁った星間雲が浮かび上がって見えるという訳。まるで、石炭を詰めた袋のように見えることから、コール・サック（石炭袋）のニックネームを冠されている。

★宝石箱（NGC4755）

南十字β星（横軸東側）から1.5°ほど南東にいったところに、またもやボヤッとした天体。今度は星雲ではなく、「散開星団）という、たくさんの星が少々まばらに集まった星のグループだ。このような天体は、全天にあまたあるものの、なかでも、このNGC4755が注目を浴びる理由は、星団を構成している星々の色が実に多彩であるから。まるで、宝石箱をひっくり返したかのようなので、一般に“宝石箱”の通称で親しまれており、小型望遠鏡でも十分楽しめる。ぜひ一度、のぞいてみて欲しい物件である。

ちなみに、星の色の違いは、その表面温度の高低から生じたもの。温度が低い星(3千度K)くらいでは赤っぽく、太陽のように6千度K前後では黄色に、1万度Kくらいだと白っぽく、さらに高温星になると、青白く輝く。このことから、宝石箱の構成要員である星々の表面温度がまちまちであることがうかがえる。星の

顔色は“星の体温計”といえよう。

★全天第一の球状星団、ケンタウルス座ω（オメガ）

南天の宝探しの真打ちは、全天最大の球状星団であるケンタウルス座「ω星団」。位置は、南十字のふたつの1等星α星(下端）とβ星(左端）を結んで、β星側に3倍ほど斜めに延ばしたところ。

大きさは、満月のふたまわりほどもの大きさ、明るさも3.7等級という、球状星団としては全天一の明るさを誇り、双眼鏡でも十分楽しめるが、東京辺りでは南中時でさえ7°ほどにしかならない。

「球状星団」とは、やはり星のグループの一種のことだが、散開星団より
はるかに密集度が多角、その名の如く、球状に分布している。また星団を構成している星々は、壮年期のものが多いため、“星界の老人ホーム”ともいえよう。

その昔、バイエルは、星団としてはあまりに明るい存在であるため、恒星と見誤り、「ケンタウルス座ω星」と星図に記してしまった。現在のその名残が、この星団の通称になっているのである。通称の知名度とは対照的に、正式名称「NGC5139」という名を知る人は、極めて少ない。

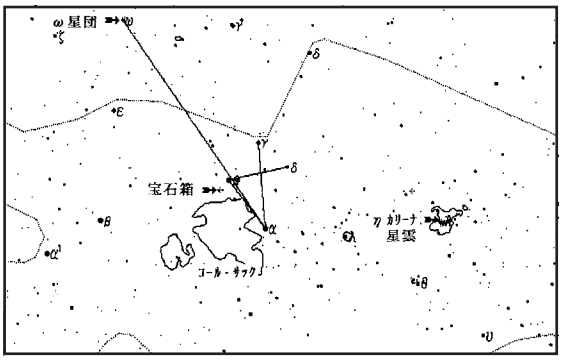


図3：天界の“宝探しマップ”

8. 謎解き：地球をひっくり返せ！

では、いよいよ謎に満ちた、南十字が2000年前の東京（本土）で見えていた理由の謎解きをしよう。はたして皆さんの(迷)解答はいかに…?

答えは、至ってカンタン。もし、地軸の向きが現在の北極星の方向ではなく、他の星の方向に向いてしまったらどうなるか？もう、おわかりだろう。

今、私たちが「北極星」と呼んでいるこぐま座α星は、北極星の座を追われ、新たに地軸が向いた先の、天の北極に最も近く、なおかつ、明るく目立つ星が「新・北極星」の玉座に輝くことになろう。それと同時に、「周極星」と「デッド・ゾーン」の領域も、現在とは異なる範囲に移り変わることになる。

つまり、2000年前の東京(本土)での南十字星は、デッド・ゾーンに属していなかったため、図1の通り、南の地平線ギリギリに立っていたのである。

理屈では確かにそうかも知れないが、はたしてそんなことが、実際に起こりえるのだろうか？

実は、それが起こるのである。まずは、身近な似たような例で解説しよう。

ここにコマがあるとして、今、このコマの様子をよ～く観察（想像）して下さい。コマは多少傾いた姿勢ではあるものの、勢いよく回転している。コマの軸はある一点に向いたまま、じっと安定しているようである。これは回転する物体の回転軸の持つ特性で、この原理を応用したものに、航空機やロケット・惑星探査機などの進路決定や姿勢検出等に、さかんに使われている「ジャイロスコープ」と呼ばれているものがある。

そうこうしている間に、コマの勢いが少し衰えてきたようだ。すると、どうだろう。今まで一点を向いていたコマの軸が、グルグルとまわりだしたではないか！いわゆる“みそすり運動”といわれるものである。実は、我々の地球でも、これと同じような運動が行われているのである。このちきゅうのみそすり運動のことを「歳差運動」と呼ぶのだが、ただしコマと違って、ひとまわりするのには、およそ25,920年ほどもの時間がかかってしまう。

この地球の歳差運動が起こる原因としては、まず第一に、地軸が黄道面に対して約23.4°傾いてくるため。第二に、地球が完全な球体ではなく、赤道方向にやや膨れた、洋なしのようなイビツなかたちをしているため。第三にそのために地球の赤道方向に、主に月や太陽の重力が、地球をひき倒すように作用し、それに地球が抵抗する力との合成運動として生ずるものである。

つまり歳差運動によって、北極星はおよそ25,920年の周期をもって移りかわっていくことになる。

ちなみに、今から5000年前ほどの、エジプトのピラミッド全盛期（B.C.2,800年頃）には、りゅう座のトゥバーンという、3.7等星という、あまりパッとしない星が北極星の大役を務めていた。

一方、未来に目を向けると、輝かしいものを感じられる。なにしろ西暦10,300年頃には、はくちょう座の1等星デネブが、同じく13,800年頃にはこと座の1等星ベガ（七夕の織り姫星）が、栄光の玉座に輝くのだから…。

反対に「天の南極」側に目を向けると、ピラミッド時代には、エリダヌス座のアケルナルが、また、ベガ

が天界の女王に輝く同時代には、カノープスが南天の玉座に昇っていることになる。

これらの星々が、いかにして“栄光の玉座への指定券”を得たかというと、地軸は無秩序に方向を変えるのではなく、ある決まった法則のもとに首振り運動をしているのである。その法則とは、地球の横道面（軌道面）に垂直な「横道の北極」と「横道の南極」とを結んだ横道の軸（歳差軸）を中心に、地軸の傾き（現在約 23.4°）を半径とし、1 周 25,920 年かけてまわっているのである。これらの星々は、ほぼ歳差円周上に位置しているために、栄光の座を射止めることができるのである。

なお、地軸の傾き加減は、時代によっても微妙に変化するものであるとともに、様々な自然現象や核実験のような人為的要因によっても不規則な地軸のふらつき現象が生じているため、厳密には 25,920 年後と、現在での北極星の位置関係がドンピシャ同じ状態とは確約できない。ただし、上記のような星々以外のものが、この時期の「北極星」や「南極星」の座を奪うような、「トンビに油揚げをさらわれる」のことわざごとき事態には、それこそ、地球がひっくり返りでもしない限り、ならないといえよう。

9. ニセモノに栄光あれ！

星の世界の"偽ブランド"ニセ十字星をご紹介したが、このニセ十字、いつまでもニセモノ呼ばわりされる肩身の狭い思いに甘んじているような意気地なしではなかったのである。西暦 8700 年頃には、なんとこのニセ十字が、南の南極に位置してしまうのだ。それも、天の南極点とニセ十字のクロスの交点とが、ほとんど一致するではないか！（図 4）

これも。歳差運動によるイタズラのなせるワザだが、こうなると、もう誰にもニセモノ呼ばわりされることもなく、栄光の“南極星”もしくは“南極座”の玉座に輝くことになるだろう。そうなると、天界の天下を取ったも同然で、豊臣秀吉の天下取りの星界版といえよう。そして、その頃になると、今度は現在のホンモノの南十字の方がニセモノ扱いされるという、“悲劇の主人公”の役を演じることになるのかも知れない。

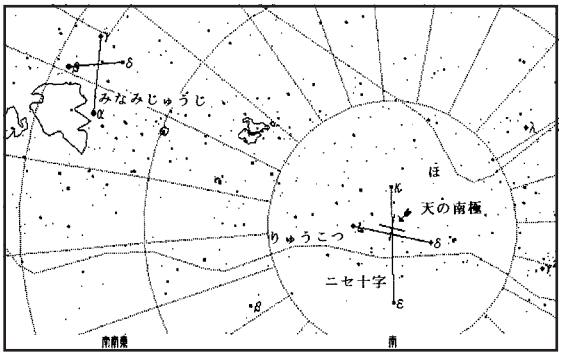


図 4：“南極座”に昇進した“ニセ十字”

皆さんもニセ十字をご覧になるときには、どうぞ、事前に眉にツバをつけてからにしてくださいネ！

■エピローグ

バリには、私たち大半の日本人が、物質文明の享受と引き替えに失ってしまった貴重な自然や、豊かな精神文化が温存されています。美しい星空にしてもしかり。この豊かな自然は、数ある文化遺産同様、未来への貴重な遺産であり、それを将来に伝えるのは、現代に生きる我々の債務でもあります。それにはまず、我々自身が、いま残されている自然に対する真価を認識しなければ始まりません。

現在の日本のように“光害”のため、満点の星空は、よほどの山奥か、はては、プラネタリウムに行かなければ堪能できないようでは、嘆かわしい限りです。ましてや、日本の風俗関連施設のごときは、貴重な電力資源を浪費してサーチライトを回転させ、掛け替えのない星空を汚すなどとの暴挙は、無知無謀を通り越し、何をか言わんやの狂気の沙汰です。

最近では、ヌサ・ドゥアの観光開発に代表されるように、ここバリにも「開発」の美名のもと、魔の手が忍び寄っていることは火を見るよりも明らかです。バリの人々と共に考え、大切な自然保護に努めようではありませんか！

この『バリ島・星空散歩道』をご愛読いただいた機会に、皆さんが星に興味を持っていただき、ひいては星に限らず、自然を大切に思う心を少しでも育んでいただけたならば、筆者にとって、これに優る幸いはありません。またいつの日か、本誌上にて皆さんとお会いできます日を楽しみにいたしております。ご愛読、ありがとうございました。

★本連載に関しますご感想、星に関しますご質問等がございましたら、お気軽にバリ天文教育センターまで、お問い合わせください。

＜連絡先＞
ASTRONOMICAL EDUCATION CENTER BALI
Kedewatan Ubud 80571 P.O.Box34 Bali, INDONESIA
Tel:62-361-974298(PULMERIA INTERNATIONAL 内)

＜参考文献＞
「ようこそ、南十字の星空へ」青木満著／バリ天文教育センター刊 (1995 年)
「バリ島・星空ツアー」テキスト (4-6 月期)

Warung ◇ 味な店

The Noodle

その名は KOLOKE

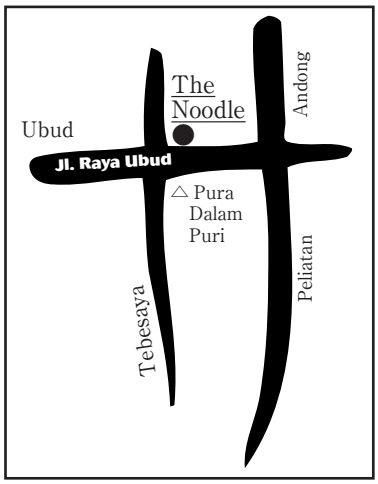
田中　雅代

そこそこの年齢になってからは、何となく小食になっており、欲張ってよーけ食べるとみょう～に怒りっぽくなるなアと云う法則めいたことに気がついてみたりして、余計なエネルギー摂取は荒々しい感情を呼ぶのかしら…などと思ってみたりする私は、どこに行ってもナシ・チャンプールひとつで充分。ちっとも飽きないし…なんて思ってはいたものの、汁そばが食べたいなアと云う希望がわいてきました。そこで、もろ“ザ・ヌードル”と云う名前の看板に誘われて相棒がみつけたその店へ入ってみますと、それはそれは麗しい笑顔の美人が迎えてくれました。

ふたりして注文してみたのはミ・アヤム・ジャカルタ。そばと具が入った日本のラーメン丼からするとかなり小振りの器と、スープがなみなみと注がれた此れまた小さな小さなお碗がテーブルに運ばれてきました。小さなお碗のスープをパシャッとそばに掛けて食べるのね？と身振りで尋ねると、そうだそうだと先刻の美女が微笑んでくれます。お伴についてきた固形物の混じったオレンジ色の液体を、やア辛そうだねーうれしいねーとヌードルに振りまぜます。と、お～～これは美味！。小さなお碗のスープにワンタンがひとつ泳いでいるのはミ・アヤム・パンシュとか云う名前だったと思います。私は特にこれが気に入っていますが、この店のワンタンごっそりのスープも大好きです。ワンタンそばが好きなのか美人のおねえさんの笑顔が嬉しいのか定かではありませんが、その後も何度か通い、おそばのおかわりをして笑われたりもしました。そんな某る日、我々はねエねエちょっと違うものも食べてみようよと云う気を起こしました。一生懸命メニューを睨んでいますと、お？何だこれは、KOLOKE ？コロケ？…コロッケのことか？おーそう云えば大好物のコロッケを私はしばらく食べていないゾ！そうだ、きょうはミ・アヤム（どうしても外せない）＋コロッケにしてみよう！と云う決断をしました。待つことしばし、相棒と私はバリで出会えるコロッケの形などに想いを馳せてワクワク盛り上っておりました。そしていよいよ例の笑顔がお皿を持って近付いてきます。わーい！！わ…ん？…ええッ？！な…なんだ、これは…。そこでデデンと現われたのは、コロコロのコロッケとは似ても似つかぬ橙色をした酢豚のようなデロンデロンの形状物体だったのです。キョトンをはるかにビッ飛ばし呆然のまなざしで皿を見つめたまま絶句。目を上げて互いの顔を見合わせて唖然。す…酢豚ならぬ酢鶏やんけー！私はそして大笑い。酢豚嫌いの相棒はガックリ。衝撃の一皿でした。その爆笑をひとりでかかえてニコニコ私が平らげたのは云うまでもありません。その日は沢山食べたせいでつまらない事に怒ったりしたかどうかは忘れましたが、なつかしいなつかしい去年のお話しです。

おいしいミ・アヤム、ぜひおためしあれ！　そして KOLOKE も！

Jl. Raya Ubud, Bali　Phone:96264

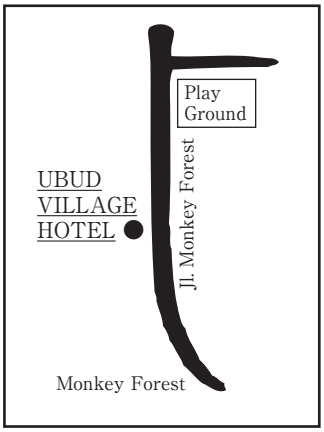


Pondok Manis

私の常宿

UBUD VILLAGE HOTEL

松本　匡央



まあ、いろいろご意見もあるかとおもいますが、まぎれもなく私の常宿であります。かれこれ100泊程しています。この先も泥酔して不祥事などを起こして出入り禁止にならない限り、お世話になるつもりです。広くてキレイな手入れの行き届いたプール。やはり午前中は、プールでのんびり過ごしたいものです。ほてった体を冷やしてくれるエアコン。確かになければないで別に困ることもありませんが、部屋がそれなりに密閉されているので、夜でも寒くなくて助かります。値段が高いとのご意見もあると思いますが、2人で泊まって55ドル。近頃では、年1回、2週間ぐらいのものですから、ガルンガン気分で景気よくいきたいものです。

さて、レストランのスタッフはみなさん感じよく、昼夜を問わず、気持ち良く飲んだくれますと日本語ばかりキカンパートのことから下ネタまで、るマデ君もいます。

アラックしか置いていないのが残念ではありますが、SAI^2 BARは、すぐ隣、キレイどころが感じのいいサービスをしてくれるYOGYAKARTA CAFEは、徒歩1分ですので、洋酒の好きな方も安心して飲んだくれることができます。

当ホテルのボスはGIANYARの方ですが、奥様はNEKA家のお嬢様でありますので絵に興味のある方はぜひどーぞ。

追伸、今回、私も何か芸を身に付けなくてはと思い、インドネシア、クロンチョンの名曲「ブンガワン・ソロ」を覚え、レストランで歌ってみせたわけですが、そんな古い歌はよく知らないけど、明日ジャカルタでボンジョビのコンサートがあるよ、だって。

UBUD VILLAGE HOTEL
Jl.Monky Forest Ubud,Gianyar 80571Bali, INDONESIA
PHONE : 62(0361)95571 Fax: 62(0361)95069

Pesan & Kesan

旅人一声

東京在住／きりん

これ なあ〜んだ? Apa itu?

UBUDの家々の屋根から、高床式の部屋にしては少し狭い建物が突き出ています。物見ヤグラのようにも見えますが、いったいこれはなんでしょう。

ヒント＝今回はあまりにも簡単なのでヒントはありません。

解答＝貯水タンク

Vol.8で公共の貯水タンクを紹介しましたが、今回は家庭用貯水タンクです。UBUDの各家庭には井戸が普及しています。これまでは、つるべによって水を汲み上げ、バケツで運んでいました。しかし近年、電気の普及は目覚ましく、モーターによって水を汲み上げることが可能になりました。汲み上げられた水は、一度タンクに貯められます。タンクは高い位置に設置され、その落差によって水道装置として水を使用することができます。これは、今までのように井戸からバケツで運んでいることに較べると、嬉しい進歩のようです。というわけで、正解は屋根より高い位置に貯水タンクが設置されていたということ。タンクはファイバー製のもの、コンクリートで造ったもの、そしてタンクが見えないように景観を考慮し？バリ風ヤグラを造っているものもあります。これもUBUDの景観のひとつです。いずれは、この塔の姿も公共水道の普及によって消えてしまうのでしょうか。

Peliharalah Lingkungan UBUD

UBUDの環境を考える

Q: 私の旅にかかせないものにカメラとウオークマンがあります。そしてひとつ気がかりになっていることが、これらに使用した乾電池の処分のことなのです。乾電池は土に還らない成分で土には良くないと聞いており、廃棄処分に困っております。どうしたらよいか処分の方法を教えてください。

A: 日本でも今のところ廃棄処分の方法がなく、回収してドラム缶につめ地中に埋めている街は良い方で、ほとんどはむやみにポイすてになっているようです。UBUDも同様、乾電池はゴミ箱にポイッ、あとは野となれ山となれ状態です。製造メーカーが回収する方法が良いと思うのですが、なにせ電池メーカーは大企業が多く、これを望むことは無理のようです。そうすると個人個人で気をつけるしか方法はありません。乾電池を使わないのがゴミを出さない、土を汚さないもっとも良い方法なのですが、そうも言っておれない人も多いと思います。そこで提案ですが、家庭用電源を利用するとか、充電式乾電池を使用するという方法はいかがでしょうか。ほかに良い方法がありましたら、お教えください。編集室ではいつでもアイデアを募集しております。
ところで東京乾電池というコント・グループがありましたが、今はどうしてるんでしょうね。ポイッと使い棄てられてしまったのでしょうか、それとも充電可能で今でも活躍しているのでしょうか。チャンチャン。

その他のニュース

■バリ・ダンス・ファン必見 !!
レゴン・フェスティバル開催 !!

去る4月20日から23日にかけての4日間、ウオルター・シュピース協会主催による「レゴン・フェスティバル」が開催されました。

ウオルター・シュピースは1920年代からバリに住み、UBUDにおける芸術の開花に多大な影響を与えたドイツの画家（1942年没）。彼の功績を讃え、バリの著名な芸術家達が、オランダの画家、ハンス･ロディウスの協力を得て、1981年に創立した協会です。創立以来、この協会は、バリの文化、芸能の保存に努め、又その新たな発展を育んできました。なかでも、毎年のように行なわれる、バリの踊りと音楽のイベントはとてもユニーク。毎回ひとつのテーマが決められ、伝統的なものばかりでなく、若者達による新しい創作舞踊なども披露されます。

今回のテーマはレゴン。レゴンは、細かなところを比べると、バリ全土で数百の、各地方ごとに違った種類とスタイルがあると言われています。4日間で演じられたのは、レゴン・クントウル、クビヤール・レゴンを始めとする、演奏曲も含めた16種類。今では観られなくなった幻のレゴンから、SMKI（国立芸術高校）の生徒によるピカピカの創作レゴンまで、これでもかというほどのバラエティー豊かな内容でした。

次のイベントが今から楽しみです。

工事中

完成

■ Jl.Monkey Forestがピカピカ !!

とうとう完成しました。Jl. Monkey Forestが。永〜いあいだ、ガタガタのドロドロ状態が続き、「こりゃ、いつになったら終わるんだ？」「う〜ん、永久にこのままなのかもね」なんてウワサされてたのです。…で、完成してみると、歩道はしっかりあるわ、オレンジ色の街灯は並んでいるわ、なんだかすごい。まるでどこかのビーチ・リゾートの通りみたい。道の両側の店も、ずいぶん後退させられ（中には取り壊されたところも）、道幅も広くなりました。かっては、薄暗い田舎道で、ここを歩くのに懐中電灯は必需品でした。昔のままのUBUDがよいなどと、ごうまんなことは決して言いません。UBUDはUBUDらしく発展してくれれば、それでよいのです。でも道が綺麗になったからって、レンタ・バイクやレンタ・カーでブンブン飛ばさないようにね！

■新しく OPEN したレストランのお知らせ

★ Cafe Cempaka

まず、Padang Tegal Kelod に "Cafe Cempaka"。2F のカフェ・コーナーは、女のコにとってとってもウレシイ穴場になりそう。というのは、とってもおいしいコーヒーとケーキを出してくれるのです。その道のプロ、Ubud 在住のミチコさんという女性がコーヒーのいれ方やケーキづくりのアドバイスをしているだけあって、ここ Ubud で本格的な味が楽しめちゃうのです。2F からのながめは田んぼが、見渡せる静かなロケーション。お友達とおしゃべりしながら、またはお気に入りの本をゆっくり読みながら Have a sweet time & Sweet cake!!

★ Permeria

次に Kedewatan にレストラン、"Permeria"。本誌の星空散歩道でおなじみの青木氏とその奥さん、SUSUN ちゃんのお店です。場所はクプクプ・バロンの手前、Ubud から行くと右側。この奥さんの SUSUN ちゃんというのが、とってもMANIS な女のコで、ていねいでやさしい心配りと話し方（日本語バッチリ！）は、日本人女性も顔負け。Gianyar 県でただひとりの日本人花婿さん（本誌調べ）である青木氏、こんなすばらしいバリ女性をみつけて幸せモノです。バリの美しい星空の話や3年越しのレストラン準備の苦労話（?）を聞きがてら、お食事にいってみては？

★ EXILES

おしゃれなレストラン＆バー、"EXILES" は Pengosekan に OPEN。Ubud には夜遅くまでお酒と料理が楽しめるナイス・スポットが少なかったのですが、できました、できました。Pengosekan からプリアタンに抜ける道の、タイ料理の Kokokan Clib のななめむかい。このお店にはステキなストーリーがあります。昔、オーストラリアで出合い、Bagus な友情を育んだ3人の男性が、いつかどこかに、気さくに仲間やお客さんが集まれるスポットをつくりたいという夢、それがここに実現したのです。その3人はフローレスのとってもかわいい奥さんをもらって、Ubud に住むつかさ、笑顔がハンサムなマーチン、そして J-Wave のナビゲーター、ロバートハリス。3人ともステキなナイス・ガイです。お料理は本格仕込みのイタリアン、お酒もカクテルも楽しめてムードばつぐんのロマンティックなバー。とっておきのおしゃれをして出かけてしまいそう。

■しちゃダメよ、借り逃げ!! 喰い逃げ!! 泊り逃げ！

これはホントーにあった実話です。

4月1日のニュピの前、とある日本人男性 Y.Y（通称ヒロ）という人物が Ubud にあらわれ、いたるところで無銭飲食、無銭宿泊、レンタカーの無銭拝借をし、数日間で多くの店が多大な被害をこうむりました。「明日、払いに来るから」とかなん

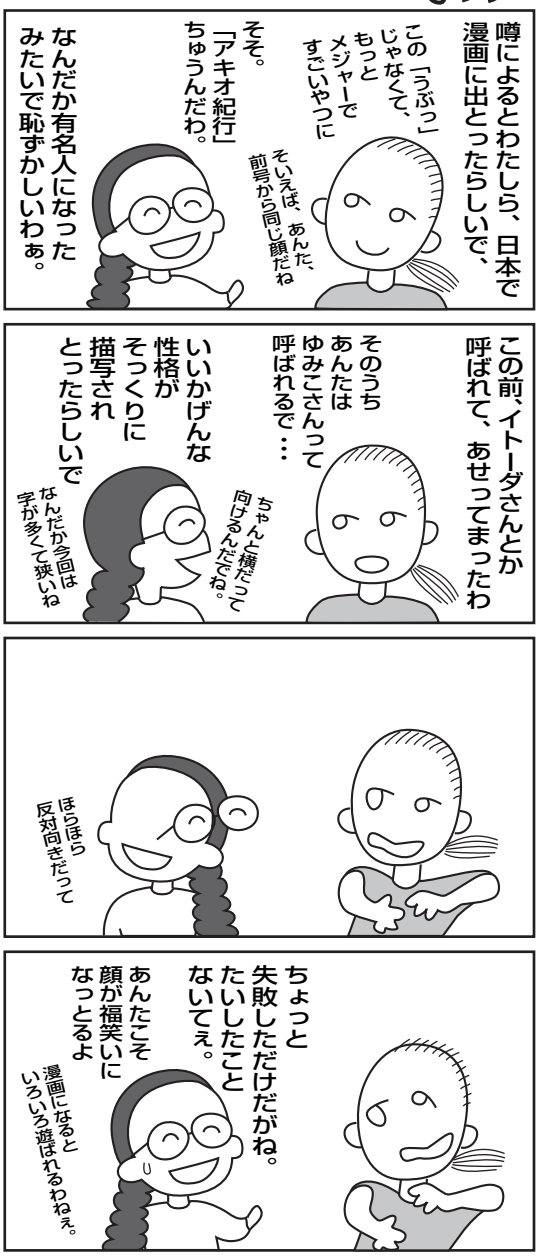
とか言って結局姿をくらませてしまったのです。あとで聞いた噂によると、彼はすでにクタでも同じようなことをしていて、有名（？）になっていたとのこと。Ubud をあとにした彼はロビナに行き、そこでとうとう御用となり、警察にお世話になってしまったそうです。なんと彼は VISA もオーバー・スティしていたのでした。Bali・Post にも事件のあらましが載り、それを読んだバリの人は「ふ～ん、こんな日本人もいるんだねえ」と、一言。そう、日本人にもいろんな人がいるんですよね。彼の置かれた状況を察するに、バリに来て楽しくて、オーバー・スティしちゃうし、お金もなくなっちゃったのにどーしてもここにいたかった、で、しかたなくこんなことになってしまった、ということなのでしょうか。イケナイことした彼だけど、少し Kasihan でもありますね。

― News 速報!! ―

'95年度 LOMBA DESA（村コンテスト）で、わが UBUD が優勝!!

毎年 インドネシア政府によって催される LOMBA DESA。
インドネシア全国の村々が、その美しさを競いあうコンテストで、みごと UBUD の村が優勝を獲得しました。
去年からコツコツと道を整備したり、道路わきに並ぶゴミ箱をピカピカに統一したりして がんばってきた UBUD 村。
7月10日に プリ・サレン前で行なわれた記念式典では、政府のお役人さんや村人たちが、UBUD お得意の ガムランや踊りを夜ふけまで楽しんでいました。
そして今も、プリ・サレンの道路ぎわに建っている やぐらの上に、1メートル以上もの高さの、輝くトロフィーが、誇らしげに飾られています。やったネ、UBUD、おめでとう!!

うぶっな人々 その9 ほりり



【年間購読申込み方法】
エアメールで、その旨手紙をください。宛先は「影の出版会：伊藤」、住所は巻末の BALI 本部です。料金は、3,000 円。おりかえし申込み用紙と送金方法をお知らせします。また、お急ぎの方は、郵便振替用紙の通信欄に年間購読希望と書いて送金してください。振替先口座：00190-6-573859「影の出版会」です。

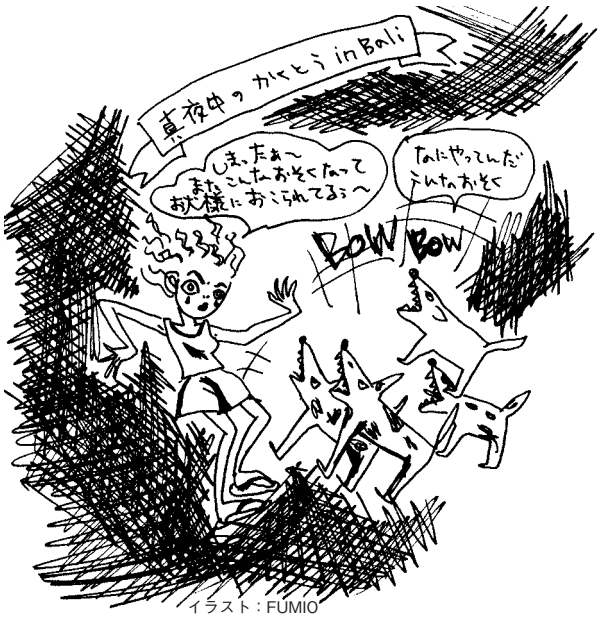
オダラン情報

July

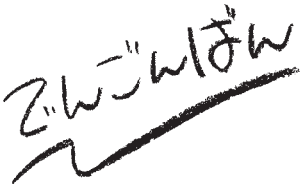
5	Pura Air Jeruk, Sukawati - Gianiyar.
	Pura Dangin Pasar, Batuan - Gianiyar.
	Pura Penataran, Batuyang - Batubulan, Gianiyar.
	Pura Buda Kliwon, Penatih - Denpasar.
	Pura Pasek Bendesa, Tagtag - Peguyangan, Denpasar.
	Pura Kawitan Dalem, Sukawati - Gianiyar.
13	Pura Dalem - Kadewatan, Celuk - Sukawati, Gianiyar.
	Pura Penataran Agung, Sukawati - Gianiyar.
	Pura Purnama, Cemenggaon - Sukawati, Gianiyar.
	Pura Pauman Bujangga, Tonja - Denpasar
19	Pura Natih, Banjar Kalah - Batubulan, Gianiyar.
	Pura Puseh, Pura Desa, Silakarang - Singapadu, Gianiyar.
	Pura Dalem Petitenget, Krobokan - Denpasar.
	Pura Dalem Pulasari, Samplangan - Gianiyar.
	Pura Piabon, Banjar Bengkel - Sumerta, Denpasar.
25	Pura Dalem, Celuk - Sukawati, Gianiyar.
	Pura Dalem Puri, Batuan - Gianiyar.
	Pura Dalem Kediri, Silakarang - Singapadu, Gianiyar.
	Pura Dalem Kangin, Sukawati - Gianiyar.
	Pura Dalem, Singakerta - Ubud.
	Pura Paibon Pasak Tangkas, Peliatan - Ubud.
	Pura Puseh Ngukuhin, Keramas - Gianiyar.
	Pura Karang Buncing, Blahbatuh - Gianiyar.
	Pura Desa, downtown of Denpasar.

August

9	Pura Puseh, Pura Desa, Sukawati - Gianiyar.
	Pura Mrajan Agung, Batuyang - Batubulan, Gianiyar.
	Pura Maspahit, Sesetan - Denpasar.
	Pura Pasek Bendesa Manik Mas,Dukuh Kenderan - - Tegallalang, Gianiyar.
19	Pura Puseh, Pura Desa, downtown of Gianiyar.
23	Pura Dalem Tarukan, Cemenggaon - Sukawati, Gianiyar.
29	Pura Dalem, Bebnawah - Gianiyar.
	Pura Dalem, Pauman Batan Getas, Titih - Denpasar.
30	Pura Dalem Tarukan, Pejeng, Gianiyar.
	Pura Batu Bolong, Canggu - Kuta.
	Pura Tirta Anom, Padangsigi - Sanding, Gianiyar.
	Pura Dadya Agung Pasak Bendesa, Dukuh Manuaba - - Tegallalang, Gianiyar.



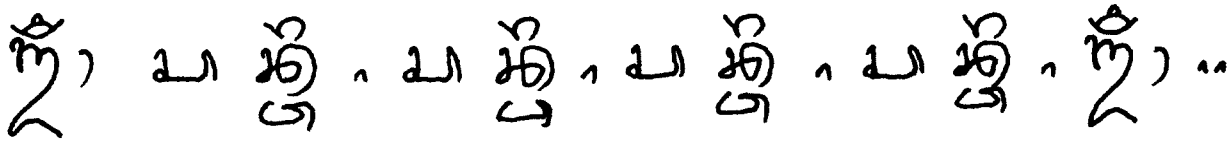
イラスト：FUMIO



Pengumumaan

STAFF の皆様、お元気ですか？昨日はじめて "極楽通信 UBUD" が届き、さっそく全部読み終り…、今とっても、いい気分でして…。BALI で買ったあやしげな or ノーテンキなリズムのカセット TAPE を B.G.M にこのハガキを書いております。Vol.7「懐かしのセゴール」「Jl.Kajeng が Baru になった！」「バリ式正装のすすめ」「Wayan 君の～」「うぶどぅ日記」「BAKSO 街道まっしぐら」クラウスのお店、BUMBU、バンガローの紹介などがよかったです。あと、ぜひバックナンバーがあれば全部ほしいのです！返信お願いしまぁす。

札幌／石井真利奈



Terima Kasih

発行人：伊藤博史

編集：伊藤博史 ／ Yumi S. ／えりり／堀　祐一

エディトリアルデザイン：菅原恵利子

写真： 堀　祐一 ／伊藤博史

カバーイラスト：M. OHHRA

ロゴデザイン：Hiroko S.

インドネシア語監修：Rianto S.

極楽通信「UBUD」Vol. 9

1995 年 6 月 25 日発行

発行・販売：影の出版会

Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha
Jl. Suweta No.16,Ubud. Bali,
80571, Indonesia tel.(0361)96134

©1995　影の出版会　禁無断掲載

影の出版会事務局

●BALI 本部　Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha Jl.Suweta No.16,
Ubud. Bali, 80571, Indonesia tel.(0361)96134

●日本連絡先　〒106　東京都港区麻布台 3-4-4 Iikura Comfy Homes B-102
ポトマック株式会社内 , tel.03(3583)0801 fax.03(3583)0803